

Supported by



THE NIPPON
FOUNDATION



2024年度日本財団助成事業

「[®]プラチナ社会実装・新産業共創」推進事業

(事業ID:2024007980)

報告書

2025年3月

一般社団法人プラチナ構想ネットワーク
(団体ID:0645423)

- 本報告書は、日本財団殿より助成頂いた「プラチナ社会実装・新産業共創」推進事業の活動・成果を取りまとめたものである。
- 私たちは、プラチナ社会を「地球が持続し、豊かで、すべての人の自己実現を可能にする社会」と定義、約400組織・人の会員と共に 強い“覚悟と決意”でその具現化・社会実装に日夜励んでいる。
- 昨年度成果である「プラチナ社会実装化モデルv1」を共通言語とし、それを適用しながら、本年度は「プラチナ森林産業」の本格実装プロジェクトの実践・立上げ、自律化・拡大へのコミュニティ形成等を実施、着実かつ極めて有益な成果を得ることができた。
- 「プラチナ社会」の実現へは、再エネ、健康・自立、人の成長、プラチナツーリズム(未来志向、移動/共感・関係人口を増やす)などの領域での「プラチナ新産業」共創、また「課題解決先進国・日本」として、それらをアジア・世界へ展開していくことが必要、次年度以降これらに全力で取り組む。
- 貴財団助成による成果の深化、拡がりに、是非、ご期待を頂きたいとともに、改めて、本事業助成に対し深く御礼を申し上げ、引き続きの助成・協働を心よりお願いする次第である。

本年度成果サマリ

- 昨年度成果「[®]プラチナ社会実装化モデルv1」を共通言語とし、[®]プラチナ「森林産業」共創の主要な牽引者が集い、対話、それにより「[®]プラチナ社会実装実践・加速」と「モデルアップデート」の好循環が創出された
 - 多くの実践者（企業、自治体、個人、研究機関等）が加わり、活動が活性化した
- 具体[®]プラチナ社会実装プロジェクトは”3つ”立ち上げ・実践段階に至った（当初目標は1つ）
 - それ以外にも6プロジェクトが始動している
- 上記を通じ、「[®]プラチナ社会実装化モデルv2」へのアップデートを実現した
- また、関連、派生活動を通じ、“トータル”な[®]プラチナ社会（「森林」以外を含む）具現化、自律的推進態勢づくりへ、「[®]プラチナ産業への共感醸成」と「仲間・コミュニティづくり」が大きく進展した

＜共感醸成/仲間・コミュニティづくり例＞

- [®]プラチナ森林産業における共感ベース・ボトムアップ型PJT創出－埼玉県横瀬町プロジェクト、森ジエネ（事業体）
- 「健康」「人の成長」産業のトリガーとなる世界こども未来会議/KODAMA PJT（少子化先進国である日韓台連携でスタート）、また、「海」の未来を創るサステナブル漁業/クラフトフィッシュ事業、などのプロジェクト、事業との連動、エコシステムづくりも推進
- 「[®]プラチナ社会実装・産業共創パートナー」としての東京大学[®]プラチナ総括寄付講座/COI-NEXT/未来実装学アカデミー（アカデミア若手リーダーコミュニティ）／SUNDREDとの連動・協働態勢の構築、そしてモーメンタムの創出とエコシステムの形成拡充・加速

補足；本年度事業－「プラチナ社会実装化モデルv1」実践を通じ得られた示唆

実践を踏まえた「プラチナ社会実装化モデルv1」の有効性と進化の方向

- 様々な森林産業プロジェクトを推進、加速する上で、「**プラチナ社会実装化モデルv1の有用性**－主体、アクティビティの適切・有効性、共通拳固としての機能jなどを改めて確認した
- ただし、「**主体群**」「**アクティビティ群**」ともに改善・進化のポイントも浮き彫りになった
 - それらを基に、モデルv2へのバージョンアップを実現した（関連学術知見、理論のアップデートも織り込んだ）
- また、**プラチナ森林産業活動における「理論的背景づくり」と「それを生かした今後の実装活動の加速・拡大（仲間づくり、プロモーション等）**」との好循環が産まれた

既存プレイヤー・活動間の隙間を埋め、相互連動・相乗を産み出す「中間活動体」の重要性とイメージ

- 東大チームの理論的バックグラウンド、SUNDREDの実践知に基づく対話から、「**中間活動体**」の重要性が確認、共有された
- SUNDREDが描いた初期仮説をたたき台として、今後も議論を深めていく－共同提言・発信も想定

目指す未来の方向、理念は同じくする、しかし得意技が異なるプレイヤーの対話を通じた共創の有効性と意図的な誘起

- **プラチナ産業イニシアティブ－東大COI-NEXT/菊池研－SUNDREDでの対話（定例会合）**を通じた、相互のアセット補完・共有の必要・有効性への気づき、共創への意欲が産まれた
- 今後、それぞれが持つPJT、フィールドでの共創を進める

参考； 昨年度成果「プラチナ社会実装化モデルv1」の概要-1

■ 「プラチナ社会実装化モデル」の定義

- 「プラチナ社会実装化」を意図を持って興こすために必要・重要な「主体/アクティビティ群」を記述
- 意図・意志を持つ人々の実践・共創を誘起し、身体知化を図るモノ（いわゆるマニュアルではない）

対象	<ul style="list-style-type: none">● 「社会変革」に強い意志を持ち、地域・分野・組織を越境してプロジェクトを動かそうとする個人や小規模チーム（仕掛け人）
場面	<ul style="list-style-type: none">● 新たに地域・分野でプロジェクトを立ち上げる／再構築する場面● 多様な組織が絡む複雑な課題・新産業分野の実装場面● プロジェクトが行き詰まり、再度ビジョンやチームの組み直しをしたい場面
活用法	<ul style="list-style-type: none">● アクティビティと主体の可視化されているため、どのフェーズで何をやるのか”、誰と連携するか”がひと目で分かるようになり、漏れなく・段取りよく活動できるようになる。● 行き詰った際に、現在の段階の確認と、不足している段階の再検討が可能になる。

参考；昨年度成果「プラチナ社会実装化モデルv1」の概要-2

■ 「主体群」－意思・意図を持ってプラチナ社会実装を興すための主体、チームの構成と要件

＜変革を後押しする集合体／「仕掛け人」＞

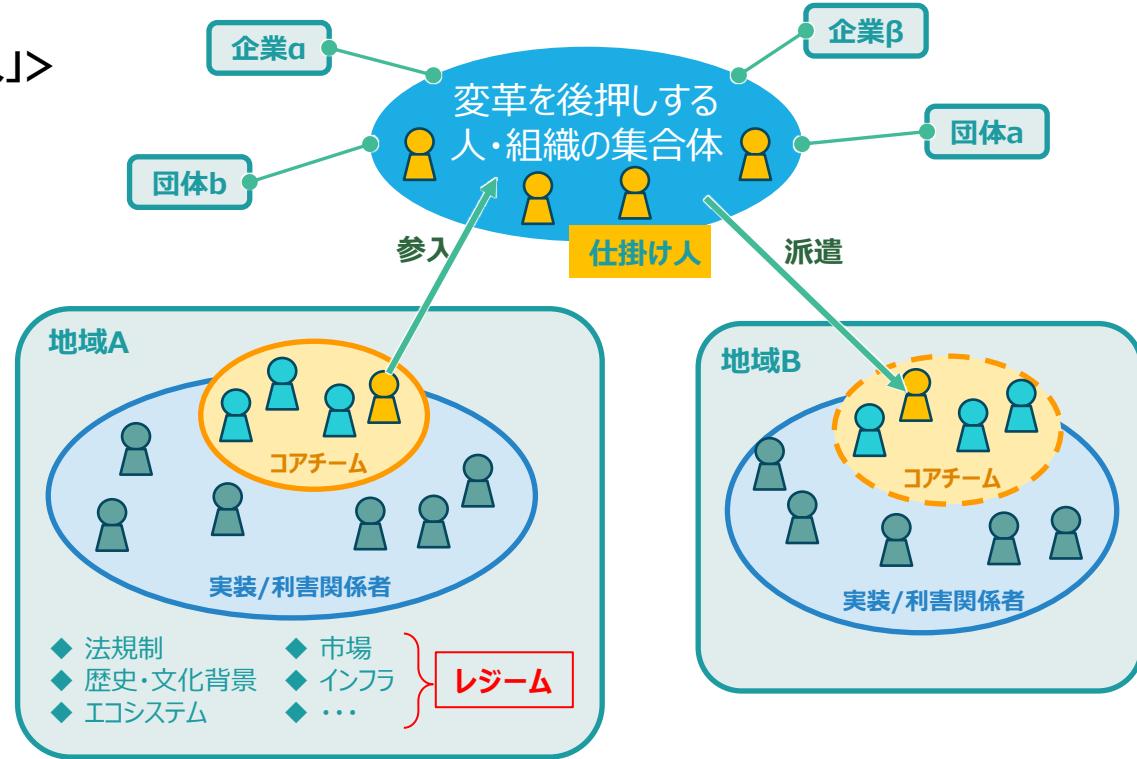
- ・ 変革を後押しする人・組織の集合体
- ・ プラチナ社会実装へのパッションを持ち、その実践に必要な多様な専門知・スキルを保有
- ・ 目的志向で、所属組織を越境し、能動・自立的に活動
(コアチームにも適宜参加、関与する)

＜コアチーム＞

- ・ 地域・社会課題への強い問題意識を保有
- ・ 様々な障害、所属組織等の制約等を超えて、自ら実践、地域・プロジェクト等を牽引

＜実装/利害関係者＞

- ・ プラチナ社会実装に必要なアセットを保有
- ・ コアチームとともに、社会実装を実践



参考；昨年度成果「プラチナ社会実装化モデルv1」の概要-3

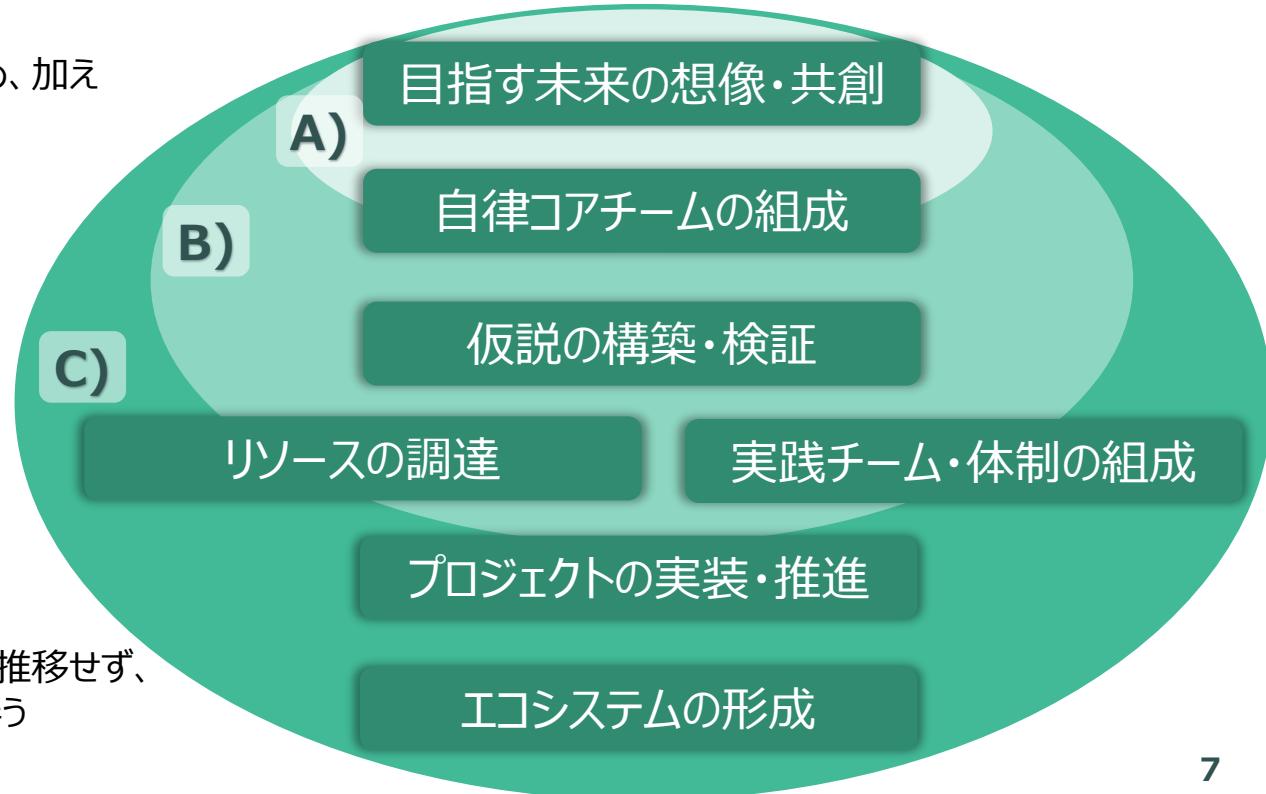
■ 「アクティビティ群」－プラチナ社会実装化に有効なアクティビティ（「トライリスト」として記述）

- (前頁提示の)
主体群の構成・状況創出のため、加えて、**各主体が実践すべきアクション群を抽出**

- 概ね、以下3フェーズで
アクティビティを区分・整理

- A) コアチーム組成・活動フェーズ
- B) 実装チーム・態勢づくり、始動フェーズ
- C) プロジェクト実装・エコシステム形成フェーズ

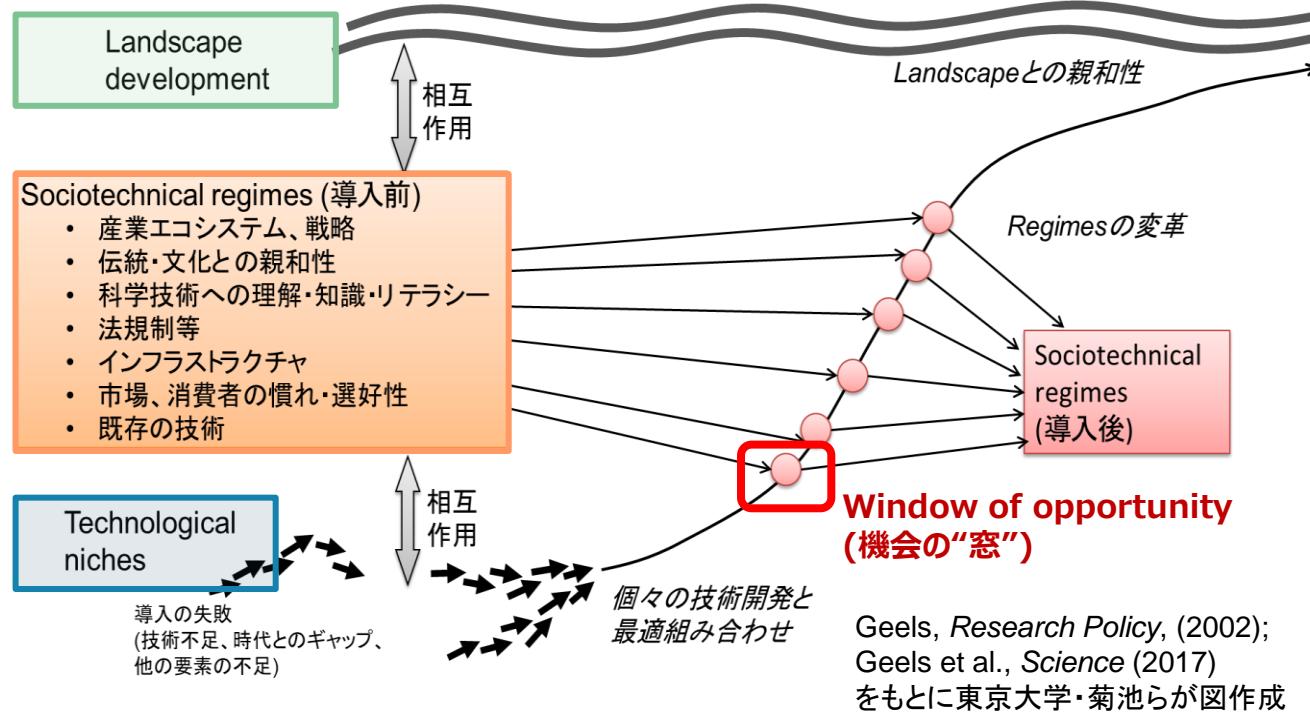
※上記フェーズは、必ずしもリニアに推移せず、
試行錯誤・行き來のプロセスを伴う



補足 ; 「プラチナ社会実装化」とは ? - 既存の学術的な知見・フレームワークに基づく定義、意味づけを設定

意思・意図を持って「社会レジーム」を変革し、かつ必要な「多様・多数のソリューション(ニッチ)」を集め、エコシステム化し、『プラチナビジョン(ランドスケープ)フィット』を行う、そして、ビジョン自体も継続進化させる、こと

- 社会実装、変革に必要な要素・構造を理解し、意思を持って“変えられること”を見出し、変える



左記は“新技術浸透・普及”に対する記述・モデルだが、“社会変革・実装”に一般化して捉える

技術が社会に導入されるか否かは、“レジーム”（取り巻く状況や体制）の影響が大きい

- 同じ技術でも社会や産業、関連技術の状態によって導入されやすさが変わる
- 技術導入の影響によって、そのレジーム自体も変化していく

以下3つの要素が噛み合ったときに、「機会の窓」が開く

- 個別技術の発展と増加
- 既存システムの弱体化
- 外圧による後押し

目次

1. プラチナ「森林産業」エコシステム・トリガー事業仮説の構想	10
1.1 「プラチナ森林産業」のビジョンとロードマップ	
1.2 産業エコシステムとトリガー事業群仮説	
2. 「プラチナ社会実装化モデルv1」適用による社会実装・産業共創プロジェクトの抽出・設計	18
3. 具体的な実装・産業共創プロジェクトの立上げ・実践と「プラチナ社会実装化モデル」のアップデート	20
3.1 立上げ・実践プロジェクトの概要と成果、今後の見通し	
3.2 「プラチナ社会実装化モデル」のアップデート	
4. 「プラチナ社会実装化モデル」の普及と社会実装・産業共創への取り組みの喚起	58
4.1 プラチナ構想NW会員向け、イベントを通じた活動	
4.2 プラチナ社会実装・産業共創の仲間・コミュニティづくり	
5. 最終目標の実現へのシナリオとアクション	64
5.1 「プラチナ社会」具現化へのシナリオ	
5.2 次年度の重点アクション（案）	
Appendix	71

1. プラチナ「森林産業」エコシステム・トリガー事業仮説の構想

1.1 「プラチナ森林産業」のビジョンとロードマップ[®]

■ ビジョン2050『日本が輝く森林循環経済』 -「プラチナ森林産業イニシアティブ」活動で取りまとめ、公表

< <https://platinum-network.jp/2023/05/23/16/26/> >

1. 基本方針

- 化石資源経済からバイオマス資源経済への移行で脱炭素を目指す
- 国産バイオマス資源のフル活用で経済安全保障を強化する
- 地方に多く賦存する森林資源を活かし地方創生と森林文化の醸成を同時に実現する

2. 『3つ』の注目領域

- ① 化石資源原料からの脱却を図る「バイオマス化学」
- ② 進展する「木造都市(まちの木造化・木質化)」
- ③ 需要の拡大が刺激する「森林・林業の革新」

3. 『3つ』の基本戦略

- ① 石油化学からバイオマス化学への転換
『技術開発・設備投資、製品利用の促進、バイオマス資源の確保』
- ② 木造都市（まちの木質化・木造化）の展開
『部材規格化、法定耐用年数、運材・流通改革、CO₂固定クレジット化』
- ③ 需要の拡大を受けた森林・林業の革新
『主伐・再造林の推進、大規模化及びCO₂クレジット再設計』

4. 森林資源フル活用の将来像

- ① 森林資源フル活用バリューチェーンの構築
- ② 森林資源活用とリサイクルで化石資源原料ゼロを実現
- ③ 木造都市とバイオマス化学でCO₂排出量を10%削減
- ④ 国内資源活用とリサイクルで約4兆円の直接経済効果

5. 実現に向けて

「迅速に実行し、ムーブメントをつくり、世界にモデルを示す」

- ① 上流・中流・下流の一気通貫
- ② 林業の大規模化・システム化
- ③ カーボンクレジットの拡充

1.1 「プラチナ森林産業」のビジョンとロードマップ[®]

■ 目標値（2050年）

- ・ 化学製品の化石資源由来 0 %、リサイクル30%、バイオマス由来70%を実現
- ・ 建築物の9階建以下の木造化・木質化100%、国産材100%を実現
- ・ 人工林樹齢40年で伐採、年間人工林伐採率2.5%、再造林率100%を実現～4倍の木質資源需要を国産材で対応

	現況	2035年	2050年
ビジョン 木質資源の需要4倍全てを国内材で賄う	木材自給率：40% 国産材：3,370万m ³	木材自給率：60% 国産材：6,400万m ³	木材自給率：100% 国産材：14,000万m ³
バイオマス化学 リサイクルとバイオマス資源で化石資源ゼロ実現	化石資源由来：87% 合計：1,700万t リサイクル12%、バイオマス1%	化石資源由来：60% 合計：1,480万t リサイクル20%、バイオマス20%	化石資源由来：0% 合計：1,265万t リサイクル30%、バイオマス70%
木造都市 9階建て以下建築物の木質化・木造化	9階建て以下 木造化率：50% 国産材活用：48%	9階建て以下 木造化率：75% 国産材活用：75%	9階建て以下 木造化率：100% 国産材活用：100%
森林・林業 3倍の面積を伐採し、すべて再造林	再造林率：37% 人工林伐採率:0.9%/年	再造林率：80% 人工林伐採率:1.8%/年	再造林率：100% 人工林伐採率2.5%/年 ※樹齢40年で伐採と想定

資料)「ビジョン2050 日本が輝く、森林循環経済」実現に向けた推進戦略

1.1 「プラチナ森林産業」のビジョンとロードマップ[®]

■ ロードマップ[®]

- 概ね2030年目途で事業検討、制度設計⇒2035年までにパイロット事業展開⇒2035年以降本格的な事業展開、で2050ビジョンの実現、目標値達成を目指す

		2022	2035	2050
バイオマス化学	バイオマス(製紙含む)	技術開発・FS 森林・林業と連携したバイオマス資源確保	パイロットプラント 森林・林業と連携体制確立	実用プロジェクト本格展開
	リサイクル	技術開発・FS 分別回収制度強化	パイロットプラント 分別回収の推進拡大	実用プロジェクト本格展開 分別回収の確立
木造都市	プロジェクト組成	公共建築物の木造化・木質化の加速 中低層建築物の木造化		街区単位の木造化・木質化 中高層建築物の木造化加速
	事業環境整備	金融機関への働きかけ（融資条件など）、メンテナンス・補修方法の確立+解体後の活用方法の検討		
	制度設計(CO2固定・JAS・建築行為等)	制度設計		制度活用横展開
森林林業	森林資源フル活用事業	事業モデル構築	パイロットプロジェクト	森林フル活用事業本格展開
	林業投資モデル	林業投資モデル構築		林業投資モデルの実践
	森林CO2吸収財務評価モデル	財務評価モデル構築		森林CO2吸収財務評価モデルの実践
啓蒙活動		機運醸成仲間づくり	情報発信強化・共感層拡大	情報発信継続・国民的普及・行動変容

1.2 産業エコシステムとトリガー事業群仮説－(1)産業エコシステム仮説

■ ビジョン具現化への産業化工コシステム仮説－「森林フル活用モデル」



地域で進む森林資源活用に向けた協議会体制の構築

<例. 富山県西部地域>

- ◆ 名称：富山県西部森林活用事業検討協議会
- ◆ 協議会設立：2024年3月25日(月)
- ◆ 参加者：
 - ・域内6市（富山県高岡市等）
 - ・商工会議所、企業 等

資料) 林野庁資料をもとにPNW作成

具体的地域でのケーススタディ・並行して全国での横展開を推進

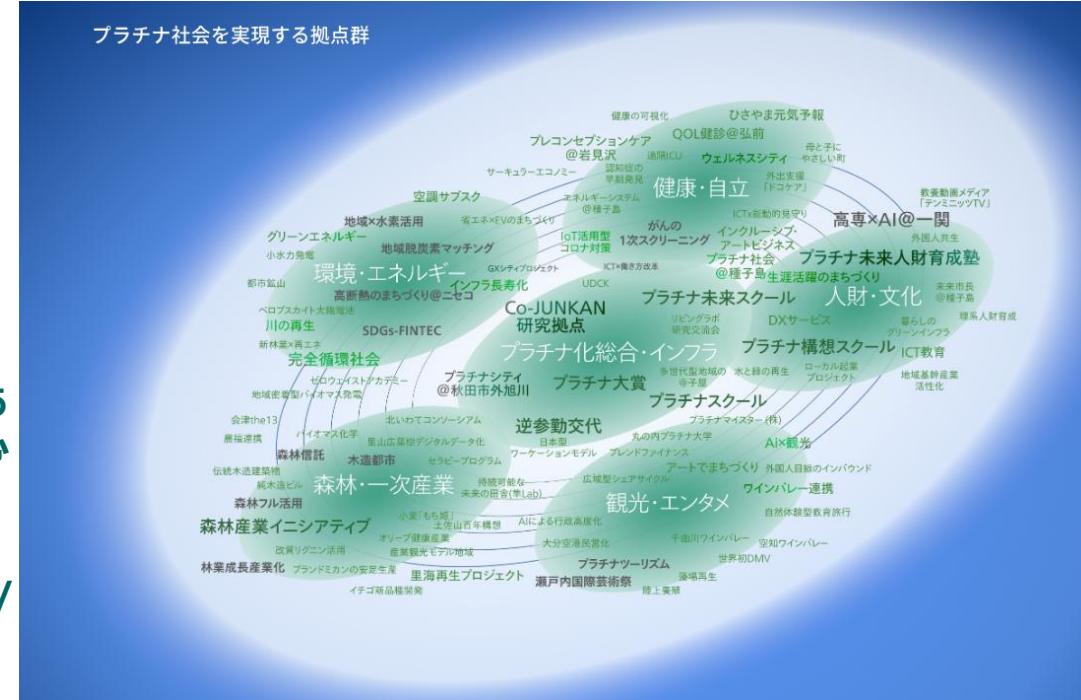
- ◆ 1,000ha (250ha/年 × 4か所) の続き森林(大規模施業地の確保→森林経営管理法の積極的履行)に向けた土地集約
 - ・民国連携等を始めとした大規模施業地の確保
 - ・森林筆界明確化→所有者探索・制度運用支援→林地集約までのケーススタディ・モデル設計の検討
- ◆ 更に10,000haの森林施業地の確保 (1,000haの続き森林×10か所、樹齢40年で伐採: 250ha/年×40年1サイクル)
- ◆ 地域連携における自治体・中央行政施策の積極活用 (既にメニューは揃っている)
- ◆ 二酸化炭素吸収量の一次データ計測と情報共有ルールの検討 (クレジット活用における各種認証等の簡素化スキームの手法)

■ 過去約15年の活動の成果－「星雲図」

- 多様多数の活動、連携を通じ、プラチナづくり、社会実装への多くの種・芽が創出された

■ プラチナ社会づくり、実装加速への プラチナ産業共創、イニシアティブ

- 個々の種・芽を固まりで捉え、相互に繋ぎ、連動・相乗させ、プラチナ社会の核となるプラチナ産業を5つ共創する
- それを具現化する掛け・仕組みとして「プラチナ産業イニシアティブ」を推進
- その第一弾が「プラチナ森林産業」であり、今回の社会実装・産業共創の中心テーマ
- 第二弾として「プラチナ再エネ産業」を立上げ、今後、健康・自律/人の成長/新たな地域観光・移動などをテーマに、イニシアティブを立ち上げる



1.2 産業エコシステムとトリガー事業群仮説 – (2)トリガー事業群仮説

■ プラチナ「森林産業」エコシステムを駆動させるトリガー事業の構成と基本要件

- 「川上」「川中」「川下」における根本・固有課題の解決、突破口となる事業を創出
 - 行政等を交えた社会システム・態勢づくりと、具体ビジネス創出（必ずしもスケールしなくとも）を両輪で推進する必要がある
 - 本領域（社会課題解決、プラチナ社会実現）では、未来アジェンダ・ソリューション共創の基盤となる具体事業・ビジネスも重要
- 産業化に向けて、「川上」「川中」「川下」を繋ぎ、好循環を産み出す基盤、仕組みを提供する事業づくりが必須
 - トータルのサプライチェーン、その合理的な検討・判断・対話が成立することが必須の条件になる
- プラチナ社会・産業の具現化、実現のためにには、共感・参加者を拡げていくことも極めて重要、科学的理解を前提としつつ、トップダウン（合理、マクロアプローチ）とボトムアップ（コミュニティづくり、共感醸成アプローチ）を両輪で、相互連動を進めていくことが大事
- 当然のことながら、上記にチャレンジする実践者・主体－マインド、ケイパビリティ、アセットを持つ－の洗い出し、コミュニティ化が不可欠であり、重要

■ 具体的なトリガー事業群候補の抽出

- 本年度事業関係者の活動、アセットを踏まえ、上記観点からトリガー事業群候補を洗い出し、抽出（次頁参照）

1.2 産業エコシステムとトリガー事業群仮説－トリガー事業群候補

	森林産業イニシアティブ主導 (トップダウンベース)		東大プラチナ主導 (トップダウン・基盤ベース)	SUNDRED主導 (ボトムアップ)	
トリガー事業候補群	森林資源フル活用モデル	北いわて、須坂市、岡山	岩手県バイオ炭、遠野市GX 他佐渡、和歌山、静岡なども候補	那須/MOE	ナスコンバレー 流域ネイチャーポジティブ
	バイオマス化学プラント	周南、愛媛		秋田	秋田県立大COI-NEXT &スポーツ/街づくり
				神奈川足柄、長野伊那	フォレストリバイタライズ産業PJT
				奈良	歴史・文化×山林リビングラボ立上げ
				北海道	プラチナ北海道支部
実装・立上げ有力候補	森林資源フル活用モデル	富山西部 高岡市商工会議所	地域GX基盤（RE-CODE）提供 事業体立上げ	「モリジエネ」事業体立上げ 埼玉県横瀬での具体事業の初動	

2. 社会実装・産業共創プロジェクトの設計

2. 対象プロジェクト選定フレームと実践・立上げプロジェクト

■ 対象プロジェクト選定フレームー視点と基準

- 社会実装への熟度 - モデルv1提示の「コアチーム組成・活動」／「実装チーム・態勢づくり、始動」への到達見込みを必須条件
- プラチナ社会実装・新産業づくりの加速、スケール化
- プラチナ社会実装・新産業共創コミュニティ形成へのインパクトー共感・自律性の醸成、関係者の拡がり

■ 具体的な実装・立上げプロジェクト

- 産業エコシステム・トリガー事業群仮説、そして上記フレームを基に、以下の6プロジェクトを実装・立上げ対象候補として抽出・設計
- これらから、「2024年度」の実装・立上げ対象としては、主に熟度の観点から①、⑤、⑥にリソース集中し、実践活動を展開した
<地域プロジェクト>

- ① 富山西部「森林資源フル活用事業」—高岡市商工会議所・プラチナ構想NW主導で協議会を立ち上げ
- ② 周南地域「バイオマス化学」—化学大手・アカデミア・プラチナ構想NW主導で調査、活動体創設に着手
- ③ 北いわて「森林資源活用地域づくり」—プラチナ/東大COI-NEXTフィールドを活用、岩手県・地域中心企業を軸にPJ立上げ着手
- ④ 秋田県「森林価値化&産業づくり」—秋田県立大・国際教養大COI-NEXTを活動母体にSUNDRED主導でPJT立上げ着手
- ⑤ 埼玉横瀬町「森林と人の相乗的、リジェネラティブ産業PJT」—横瀬町・共感ベースで集う企業/個を束ね、SUNDREDチームの主導でPJT立上げ中

<事業体創出プロジェクト>

- ⑥ 「脱炭素・地域経循環」効果評価・シミュレーションの実装事業—東大プラチナが開発したツール普及への事業体立上げ

3.具体的な実装・産業共創プロジェクトの立上げ・実践と 「プラチナ社会実装化モデル」のアップデート

3.1 立上げ・実践プロジェクトの概要と成果、今後の見通し

(1) 富山県西部「森林資源フル活用事業」-①プロジェクト概要

■ 全体像

- プラチナ森林産業イニシアティブで提案している森林資源フル活用モデルの実現を目指す
- 森林資源フル活用に向けて、川上～川下までサプライチェーンを構築する事業
- 最終的な木質資源の利用を「木質バイオマス熱供給事業」とする
- 建材として活用のできる良材（丸太）は製材所等に提供
- 事業の実現には必要に応じて事業検討協議会メンバーを核とする特定目的会社（SPC）の設立を視野に入れる

上流から下流までのサプライチェーンの5つの事業

種苗事業：針葉樹、広葉樹

育林事業：地拵え、植林、下草狩り、除伐、

素材生産事業：収穫間伐、主伐

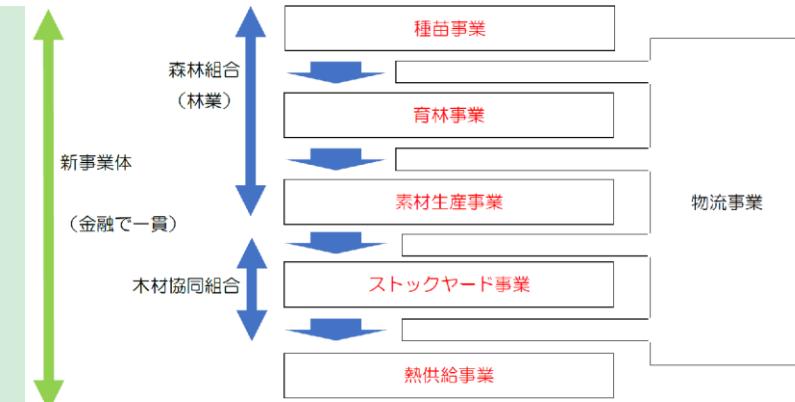
ストックヤード事業：選木、天乾、原木販売、チップ製造・供給・販売、（製材）

熱供給事業：木質バイオマスボイラによる、温水または蒸気供給

上記5つの事業を横断する2つの事業

物流事業：苗木、丸太、チップ…

金融事業：森林価値の流動化を目指した資金（資本）調達と資産運用



3.1 立上げ・実践プロジェクトの概要と成果、今後の見通し

(1) 富山県西部「森林資源フル活用事業」-①プロジェクト概要



■ 推進体制

- 地元経済界を中心で民間主導で産官学の協議会を構築
- 協議会のもとに、事業全体を検討する検討員会、そのもとに事業テーマごとの5つの検討部会を設置して事業計画を検討

富山県西部森林活用事業検討協議会 概要

- 設立：2024年3月25日
- 理事：塩谷雄一（理事長）、菅野克志（副理事長）、中村正治、岸田毅、島田優平、稻垣晴彦、能作克治、二口真
- 監事：廣嶋康雄
- 事務局長：西田隆文
- 事務局所在地：〒933-8567 富山県高岡市丸の内1-40 高岡商工ビル4F
- 事業検討委員会
 - 委員長：武山良三（富山大学副学長）
 - 検討部会：種苗事業、育林事業、素材生産事業、ストックヤード事業、熱供給事業
- 会員：当会趣旨に賛同する自治体、法人、個人
 - 正会員：高岡市、射水市、氷見市、砺波市、小矢部市、南砺市に登記、または住民票
 - 賛助会員：上記以外の全て
- 会費：5千円/年

3.1 立上げ・実践プロジェクトの概要と成果、今後の見通し (1) 富山県西部「森林資源フル活用事業」-①プロジェクト概要



参考；シンポジウム



特別講演

「森林資源フル活用事業への期待」

林野庁 次長 小坂善太郎氏

基調講演

**「自然と人が共生する社会デザイン」
地域の自然・文化を活かした産業創出**

富山大学 理事・副学長 武山良三氏

講演タイトルは変更になる場合があります。

パネルディスカッション		
林野庁	次長	小坂善太郎
プラチナ構想ネットワーク	事務局長	平石和昭
高岡ガス株式会社	代表取締役	菅野克志
万葉線株式会社	代表取締役	中村正治
南砺森林資源利用協同組合	副理事長	島田優平
モダレータ：富山県西部森林活用事業検討協議会 事務局	理事・副学長	小林靖尚
講評：富山大学	理事・副学長	武山良三

主催：富山県西部森林活用事業検討協議会

後援：富山県、高岡市、射水市、氷見市、砺波市、小矢部市、南砺市

2024年

7月30日(火) 14時～17時30分 入場無料

高岡商工ビル 2Fホール（富山県高岡市丸の内1-40）

情報交換会：18時～19時30分 3,000円/人（希望者のみ、立食形式）



地方創生の基盤となる地域経済循環と、二酸化炭素排出削減は緊密な課題です。2024年3月に「富山県西部森林活用事業検討協議会」を設立し、川上～川下まで森林資源の活用を検討し、課題を解決し、社会実装していきます。山林所有者および地主様または信託受益権をお預かりし、植林をして美しい里山に戻していきます。さらに、耕種地・原野、荒廃農地も対象として苗木を植え、二酸化炭素吸収力を高め二酸化炭素排出削減によって日本全体の脱炭素化への貢献を目指します。未来の北陸の豊かな森林のありかたについて、ともに知恵を出し合いたいと思います。シンポジウム、情報交換会に多くの皆様にご参加いただきお詫び申し上げます。

富山県西部森林活用事業検討協議会 理事長 塩谷雄一



高岡市では、市民、事業者、行政のすべての「ひとの力」を合わせ、脱炭素と経済成長の両立に加え、資源循環によるサーキュラーエコノミー（循環経済）に挑戦しています。昨年11月には、本市の目標とする取り組みが県内で初めて、全国のモデルとなる「脱炭素先行地域」に選定されました。

カーボンニュートラルの実現には、二酸化炭素の吸収対策は不可欠であり、森林はその重要な役割を担っていますが、樹木は50年を過ぎると成長量が落ち二酸化炭素吸収力が減衰してきます。森林の活力を取り戻し、美しい里山とともに豊かに生きる具体的な方法について、今回のシンポジウムをきっかけに、市民、事業者の皆様とともに考えたいと思います。是非とも多くの方々にご参加いただけますと幸いです。

高岡市長 角田悠紀

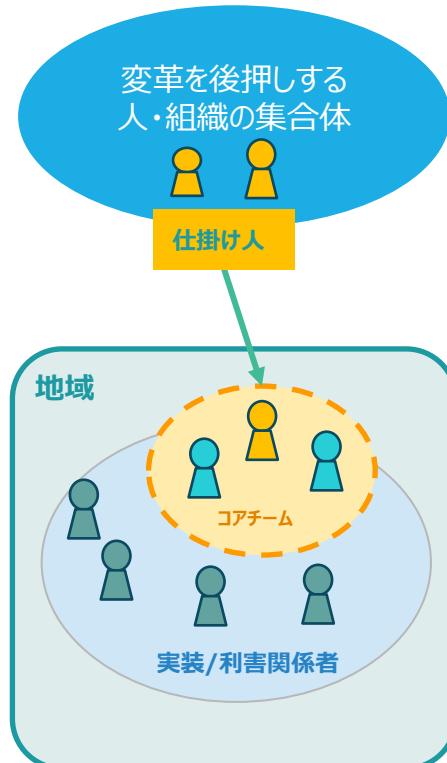
<プログラム>

13:45 開場	富山県西部森林活用事業検討協議会 理事長 塩谷雄一
14:00 開会	
14:10 特別講演	林野庁 次長 小坂善太郎
14:50 基調講演	富山大学 副学長 武山良三
15:30～15:45 (休憩)	
15:45 パネルディスカッション（事業検討協議会の検討予定内容紹介含む）	
17:15 講評	富山大学 理事・副学長 武山良三
17:30 閉会	富山県西部森林活用事業検討協議会 理事 二口真

3.1 立上げ・実践プロジェクトの概要と成果、今後の見通し

(1) 富山県西部「森林資源フル活用事業」-②モデルv1適用概要

■ 主体群



カテゴリー	該当者	特徴
変革を後押しする人・組織の集合体	プラチナ構想ネットワーク	<ul style="list-style-type: none">全国的なプラチナビジョンの実現を目指す連携基盤として、各地域の取り組みを統合・横展開する役割。
仕掛け人	プラチナ森林産業イニシアティブ 森林・林業革新分科会 リーダー	<ul style="list-style-type: none">株式会社アルファフォーラム代表として、運営面で具体的な事業推進や意思決定の中心となり、プロジェクトの実装力を支えている。いくつかの地域で立ち上げ支援に携わった経験があり、富山西部のプロジェクトでもリーダー的役割を担う。「相当な突破力と馬力があるが、衝突も起こりやすい“熱血リーダー”タイプ」。
コアチーム	地元商工会 中核メンバー	<ul style="list-style-type: none">地元商工会議所のキーパーソンとして、富山の産業界を本プロジェクトに引き合わせた。地元経営者としての信用・安心感を提供するクッション役を果たしている。
実装/利害関係者	富山県西部森林活用事業検討協議会 高岡市商工会議所 ほか	<ul style="list-style-type: none">富山県西部の森林資源活用・地域循環経済の推進を担う中核組織として、協議会自体がプロジェクト全体の枠組みを形成している

3.1 立上げ・実践プロジェクトの概要と成果、今後の見通し

(1) 富山県西部「森林資源フル活用事業」-②モデルv1適用概要



■ アクティビティ群

アクティビティ	具体的な活動内容 ※太字項目はプラチナ社会実装化モデル駆動のキー
未来ビジョンの共創	<ul style="list-style-type: none">・ プラチナ構想ネットワークにてプラチナ森林産業ビジョンを策定。・ プラチナ構想ネットワーク事務局が専門家の知見を集約して策定。 →次のフェーズへ
自律コアチーム組成	<ul style="list-style-type: none">・ コアとなるリーダー[†]プラチナ森林産業イニシアティブ分科会リーダー、彼が地元商工課中核メンバーに協力を依頼する。 →次のフェーズへ・ 地元商工会議所のキーパーソンである中村氏が地元経営者層への働きかけを行う。
仮説の構築・検証	<ul style="list-style-type: none">・ 「森林フル活用モデル」を策定 →次のフェーズへ
実践チーム・体制の組成	<ul style="list-style-type: none">・ 高岡市商工会議所を中心に、地域の主要経済界や林業関係者、自治体関係者が定期的な懇談会や会合を通じて、実装推進の中核組織として連携体制を整備。先進事例視察も。・ 富山県西部森林活用事業検討協議会を設立。・ 協議会での各部会にて検討。検討結果を取りまとめ、事業体制や推進計画を具体化。・ 事業検討協議会メンバーを核とする特定目的会社（SPC）の設立を検討。
リソース調達	<ul style="list-style-type: none">・ プロジェクト実装推進前については、小林氏ほか持ち出しにて賄う。・ 人的リソースは足りていない。特に「自分事として動けるリーダー層」がいる」とい。
実装	<p>(未到達)</p> <ul style="list-style-type: none">・ 「ゴールを100としたら20～30%程度」の進捗状況。・ 山林所有者の合意形成・補助金申請・大規模な伐採運営計画など、多くの難所が控えている。
エコシステム形成	<p>(未到達)</p> <ul style="list-style-type: none">・ 富山西部でのプロジェクトを足がかりに、他地域（岩手・周南ほか）への水平展開を目指す。・ そのために、プラチナ構想ネットワークとしては「視察企画やシンポジウム」を開き、先行事例（富山西部）のノウハウをほかの企業や自治体にも共有したい。

3.1 立上げ・実践プロジェクトの概要と成果、今後の見通し

(1) 富山県西部「森林資源フル活用事業」– ③成果、今後の見通し

■ 成果概要と今後の活動

- 富山県西部森林活用事業検討協議会の森林資源フル活用に向け、川上～川下まで合理的な活動・体制を設計、起動した
- 今後、それをベースとした実装活動を加速させる
 - 中央行政、県市町村、学識経験者の協力を得て、機動力のある「なくてはならない」民間事業グループを目指す
 - 必要に応じて事業検討協議会メンバーを核とする特定目的会社（SPC）の設立を視野に入れる

■ プラチナ社会実装・産業共創具現化のポイントと浮き彫りになった課題

＜具現化のポイント＞

- ビジョンの提示による地元強力なステークホルダーのメンバーの合意形成・体制構築
- 民間主導でのスピーディな検討・合意形成
- 自治体との連携の取り付け（プラチナ懇談会）
- 事業加速のための地元でのムーブメントづくり（シンポジウム）

＜浮き彫りになった課題－社会実装・産業共創の更なる進捗に向けて＞

- ビジョンの提示による地元強力なステークホルダーのメンバーの合意形成・体制構築
- 民間主導でのスピーディな検討・合意形成
- 自治体との連携の取り付け（プラチナ懇談会）
- 事業加速のための地元でのムーブメントづくり（シンポジウム）

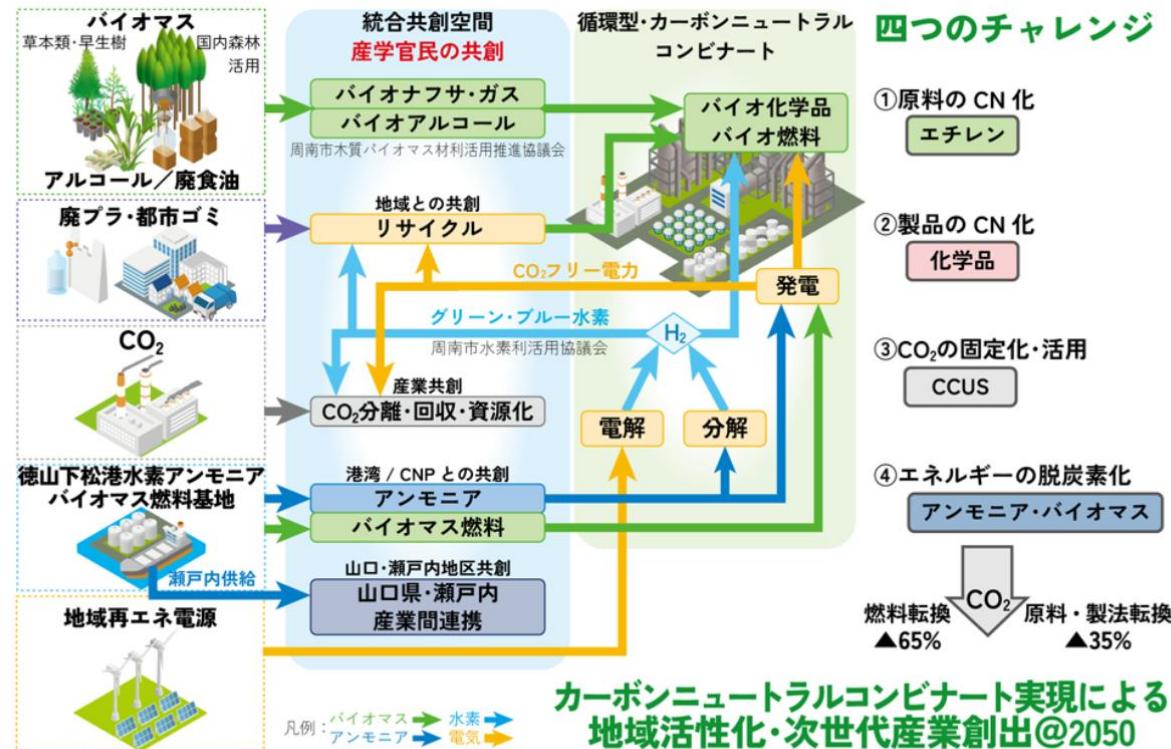
■ 今後の計画、見通し

- 2025年5月に協議会総会を開催、今年度とりまとめ（事業計画等）を公表
- 事業推進体制の構築、事業具体化に着手

3.1 立上げ・実践プロジェクトの概要と成果、今後の見通し

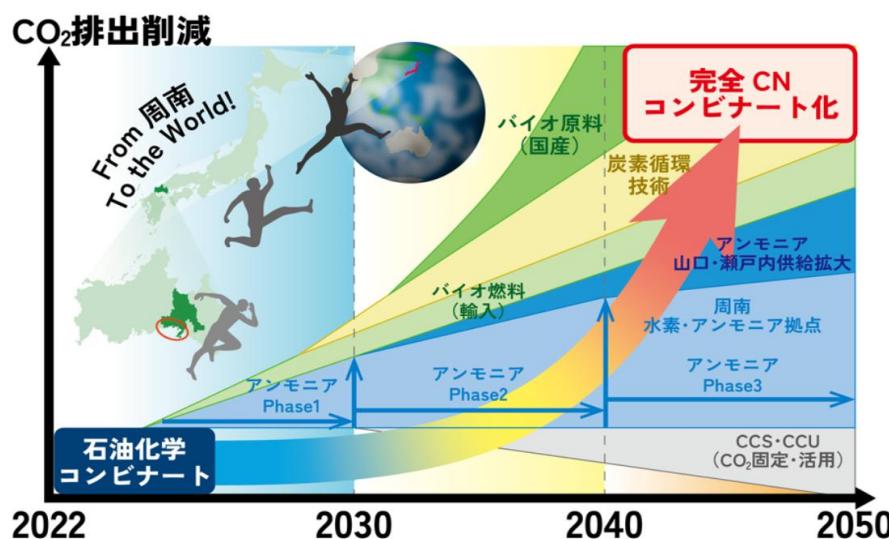
(1) 富山県西部「森林資源フル活用事業」－今後の立上げプロジェクト候補例

参考；周南カーボンニュートラルコンビナート構想（未来共創センターへ）



3.1 立上げ・実践プロジェクトの概要と成果、今後の見通し

(1) 富山県西部「森林資源フル活用事業」－今後の立上げプロジェクト候補例



Copyright (c)周南コンビナート脱炭素推進協議会. All Rights Reserved.



3.1 立上げ・実践プロジェクトの概要と成果、今後の見通し

(1) 富山県西部「森林資源フル活用事業」－今後の立上げプロジェクト候補例

参考；岩手県・宮古－森林・環境・エネルギー産業研究会

宮古・下関伊モノづくりネットワーク
**森林・環境・エネルギー産業
研究会設立記念フォーラム**



（研究会の開催趣旨）

木質バイオマスを活用した熱電供給によるまちづくりは各地で始まっており、石油化学に代わるバイオマス化は既に実現段階にあります。

さらに、森林環境課題と結びタグレットなどの新制度や、森林GISなどの新技術により、林業のビジネスチャンスも広げています。

こうした今こそ、農業や首長の地域を取り扱い「宮古・下関伊モノづくりネットワークに集まる森林・環境・エネルギー産業」の創出を目指していきましょう。

日 時：令和6年 9月 25日（水）14:30～16:30
場 所：宮古港フェリーターミナルビル 3階 会議室
宮古市磯賀第4地割114-1

■ 業界説明
森林・環境・エネルギー産業の創出に向けて
沿岸広域振興局宮古農林振興センター林務室長 竹花 光弘

■ 基調講演
日本が輝く、森林循環経済の構築を目指して
(一社) プラチナ構想ネットワーク事務局顧問 鎌形太郎

■ 事例紹介
建設業と林業の複合経営、そして環境産業へ
有限会社 谷地林業 代表取締役 谷地 譲、渡部雅裕

■ トークセッション
① わが町の森林環境課題とその活用法
② わが社の林業参入チャレンジ

申込み方法
①参加方法【会場のみ】 ②所属企業・団体名 ③氏名 ④電話番号
⑤メールアドレスを以下の問い合わせ先へ9/20（金）までにメールでお送りください。

主催：宮古・下関伊モノづくりネットワーク林産部会
共催：北いわて産業・社会革新推進コンソーシアム
(事務局：県ふるさと振興課県北・沿岸振興室、岩手県立大学研究・地域連携室)
問い合わせ先：岩手県 沿岸広域振興局宮古農林振興センター林務室
TEL 0193-64-2215 FAX 0193-64-4594 Mail bj0005@pref.iwate.jp

宮古・下関伊モノづくりネットワーク
**「森林・環境・エネルギー産業」
第2回研究会の開催**

（第2回研究会の開催趣旨）

木質バイオマスを活用した熱電供給によるまちづくりは各地で始まっており、石油化学に代わるバイオマス化は既に実現段階にあります。

第2回の研究会では、福井県で民間事業者が実施した「木質バイオマスを生かした地域熱供給事業を開始した」「もりもりバイオマス株式会社との取組を研究することとともに、住友商事とソラリアントキャピタルが事業化を目指す「国産バイオマスによるバイオ燃料・バイオケミカル製造」の取組を研究します。



日 時：令和6年 11月 26日（火）14:00～16:00
場 所：宮古港フェリーターミナルビル 3階 会議室
宮古市磯賀第4地割114-1

■ 基調講演
もりもりバイオマス株式会社による地域熱供給事業の展開
株式会社アルファフォーラム 代表取締役社長 小林 靖尚
もりもりバイオマス株式会社 顧問

■ 事例紹介
木質バイオマスを原料とするバイオ燃料・バイオケミカル製造の展望
(紹介者) プラチナ構想ネットワーク 顧問 鎌形 太郎
森オンラインで事業者とつなぎながら取組を紹介します。

■ トークセッション
木質バイオマスを活用した地域熱供給事業の未来
林業・林産関係者や振興事業者、行政等の皆さんと講演者との
トークセッション (司会) 宮古農林振興センター林務室 室長 竹花 光弘

申込み方法
①参加方法【会場のみ】 ②所属企業・団体名 ③氏名 ④電話番号
⑤メールアドレスを以下の問い合わせ先へ9/20（木）までにメールでお送りください。
TEL 0193-64-2215 FAX 0193-64-4594 Mail bj0005@pref.iwate.jp

主催：宮古・下関伊モノづくりネットワーク林産部会
共催：北いわて産業・社会革新推進コンソーシアム
(事務局：県ふるさと振興課県北・沿岸振興室、岩手県立大学研究・地域連携室)
問い合わせ先：岩手県 沿岸広域振興局宮古農林振興センター林務室
TEL 0193-64-2215 FAX 0193-64-4594 Mail bj0005@pref.iwate.jp

3.1 立上げ・実践プロジェクトの概要と成果、今後の見通し

(2)横瀬町「森林と人の相乗的なリジエネラティブ産業PJT」-①プロジェクト概要



■ プロジェクト概要

- 自治体との連携により、“共感”を起点として、暮らし、サイエンス、ビジネス、行政などの多様な切り口での価値共創を推進し得るプロジェクトを、首長・自治体との対話を通じて探索、構想
- 「森に人が関わるほどに、生態系が回復し、人々の心も暮らしも豊かになる価値循環の仕組み」を具現化する「リビングフォレスト」プロジェクトを構想、実践を設計

■ 実践主体となる「モリジエネ」の立上げ

- 森林資源の持続可能な活用と、人と森の新たな関係構築を目指し、共創型のプロジェクトを展開
- 従来の木材産業の収益モデルの限界、森林の管理・活用に関わる人材減少などの課題を踏まえ、「森林データの可視化と整備」「森林空間での新たな体験創出」「デジタル技術を活用した価値循環の構築」を軸にプロジェクトを推進

<具体的なサービス>

- 森林活用のためのコンサルティング
 - 森林関連事業者の取り組みを丁寧にヒアリングし、その価値が発揮されるシチュエーションや提供可能な条件を理解した上で、事業者に代わって潜在ユーザーへサービス紹介を実施
- 自然教育・体験の提供
 - 人々が森林に関わることで生態系が回復し、心や暮らしも豊かになる価値循環の仕組みを創ることを目指し、自然教育や体験を提供

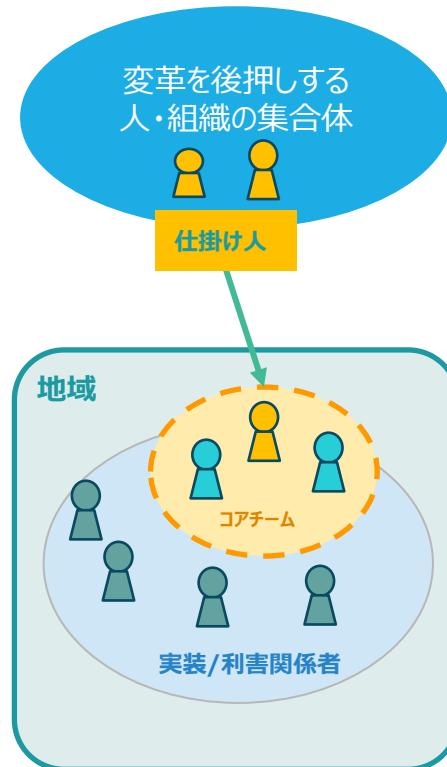
<特徴>

- 対話型イベント「フューチャーボード」を重ねる中でビジョンや活動を共創－固定的ではなく、対話の中で流動的にアップデート
- DAOの導入など分散型エコシステムの形成・駆動を推進－コアメンバー+準メンバー（必要や希望があるときに参画）で活動

3.1 立上げ・実践プロジェクトの概要と成果、今後の見通し

(2)横瀬町「森林と人の相乗的なりジェネラティブ産業PJT」 - ②モデルv1適用概要

■ 主体群



主体群	具体的な名称・役割	特徴／注目点
変革を後押しする 人・組織の集合体	SUNDRED社	<ul style="list-style-type: none">新産業創出を推進するプラットフォームとして機能し、森ジエネを含む複数のプロジェクトを結びつける。「フォレストリバーサル産業」や「フューチャーボード」などの仕組みを提供し、変革の担い手同士をつなぎ、対話・共創の場をつくっている。
仕掛け人	モリジエネ (吉井氏・大和多氏・ 山口氏)	<ul style="list-style-type: none">もともと森林に関する活動を個別に進めていた・「森の新産業を興したい」という共通の思いで自然発生的に集まり、最初の火付け役となる
コアチーム	モリジエネ (吉井氏・大和多氏・ 山口氏)	<ul style="list-style-type: none">仕掛け人が発展し、週1回の定例Mtgを軸に“正式なチーム”として活動ゆるやかかつ自律的に進め、外部と連携する際の“中核”
実装／利害関係者	準メンバーや関連企業 横瀬町、那須などの フィールド関係者	<ul style="list-style-type: none">コアチームを支える“周辺”的なプレイヤー・「面白そうだから参加したい」という共感ベースで協力企業・自治体も、“個人レベル”的な意思で巻き込み

3.1 立上げ・実践プロジェクトの概要と成果、今後の見通し

(2)横瀬町「森林と人の相乗的なりジェネラティブ産業PJT」 - ②モデルv1適用概要



■ アクティビティ群-1/2

アクティビティ	具体的な活動内容 ※太字項目がプラチナ社会実装化モデル駆動のキー
目指す未来の想像・共創	<ul style="list-style-type: none">対話を重ねながらビジョンを形成（合宿やワークショップを活用）→次のフェーズへフューチャーボードを活用し、発散・収束を繰り返しながらビジョンを具体化「森に人が関わるほどに、生態系が回復し、人々の心も暮らしも豊かになる価値循環の仕組み」を目指す多様な関係者（企業、自治体、研究機関）と対話し、ビジョンを共創
自律コアチームの組成	<ul style="list-style-type: none">企業で森林に関わる活動事業に想いのある3人で活動を開始 →次のフェーズへ強いリーダーシップではなく、対話を通じた共感形成を重視コアメンバーの周囲に「準メンバー」として関係者を配置し、流動的なチームを形成自然発的にチームが形成され、縛りの強い組織化は行わない個々が独立しながらつながることを意識
仮説の構築・検証	<ul style="list-style-type: none">フューチャーボード（アジェンダ共創対話@SUNDRED）を活用、複数回の対話を経て仮説を構築 →次のフェーズへ小規模な実証実験（POC）を繰り返しながら、柔軟に仮説を修正「まずやってみる」「面白がる人を巻き込む」ことを重視フィールドワークやデータ分析を通じて、新たな関係性や仮説を形成企業や研究機関との協力で、森林のデータ取得解析実証実験を進める実証実験の結果とフィードバックを基に、新産業の価値を探索

3.1 立上げ・実践プロジェクトの概要と成果、今後の見通し

(2)横瀬町「森林と人の相乗的なリジエネラティブ産業PJT」 - ②モデルv1適用概要

■ アクティビティ群-2/2

アクティビティ	具体的な活動内容 ※太字項目がプラチナ社会実装化モデル駆動のキー
リソースの調達	<ul style="list-style-type: none">資金調達よりも「共感による協力関係の構築」を優先企業との連携も、まずは「個人の関係性」から始まるTIS社の「WOODDREAMDECK」に参画企業単位ではなく、個人ベースでのコラボレーションが多い森林のデータ解析や実証実験を進め、研究機関とも連携エコシステムパートナー（森林保有者、事業者、大学、自治体）を募集
実践チーム・体制の組成	<ul style="list-style-type: none">コアメンバー + 準メンバーの関係性を活かした流動的なチーム形成 →次のフェーズへ企業や自治体との協力を通じて、実践チームを組成DAOによる新しい組織モデルの活用森林活用のコンサルティングマッチング、自然教育体験の提供「リビングフォレスト南足柄」の開始（地域コラボ）企業や研究機関と協力し、森林の有効活用を促進縛りの強い組織化ではなく、関係性を広げながら柔軟に変化
プロジェクトの実装・推進	<ul style="list-style-type: none">週1回30分の定例ミーティングを実施し、最低限の進捗管理を行うフューチャーボードを活用し、節目ごとに方向性を調整記録を残しながらも、過度なマネジメントは避けるガチガチの進捗管理ではなく、最低限のルールと余白を持たせるデータベース的に記録を残し、ナレッジ共有を意識
エコシステムの形成	<ul style="list-style-type: none">森林所有者、自治体（横瀬町）、企業、研究機関を巻き込んだエコシステム形成リビングフォレスト（南足柄）を拠点とした地域連携DAOを活用した分散型エコシステムの形成競争ではなく、共創を重視した産業エコシステムの構築

3.1 立上げ・実践プロジェクトの概要と成果、今後の見通し

(2)横瀬町「森林と人の相乗的なリジエネラティブ産業PJT」 – ③成果、今後の見通し



■ 成果；今年度の到達点 – プラチナ社会実装・産業共創具現化のポイントと浮き彫りになった課題

〈具現化のポイント〉

- ビジョン・想いのあるコアチームを起点、核とした実装コミュニティの形成
 - 他に仕事を持つ、しかし想いは強く同じくし、越境して活動する同士が核となる
- この段階において必要なフィールド、資金等を持つ関係者との共感、協働態勢の構築

〈浮き彫りになった課題 – 社会実装・産業共創の更なる進歩に向けて〉

- 初動におけるリソース確保 – コアメンバーの時間の確保、初動予算の調達

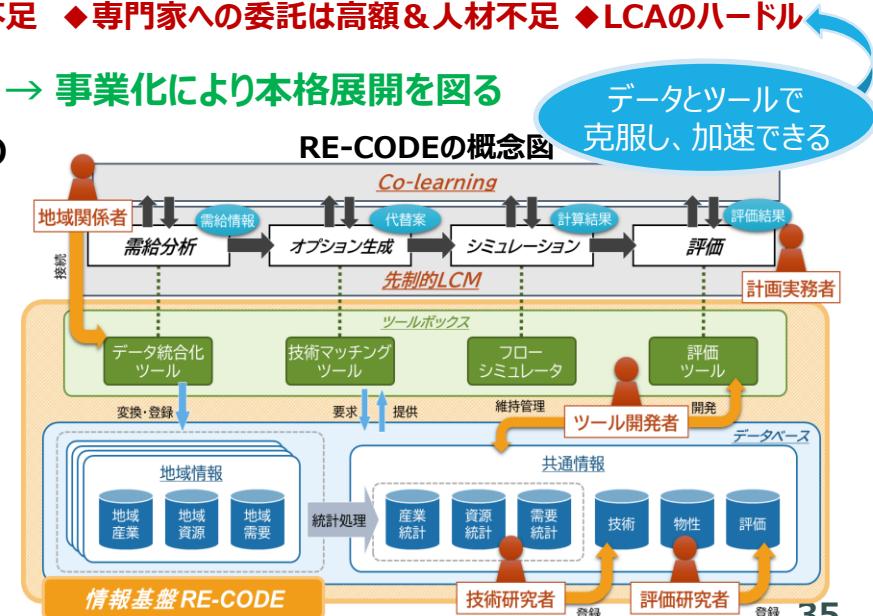
■ 今後の計画、見通し

- 関連する国事業予算を確保・調達しつつ、具体実装事業を実施
 - 自治体とも密に連携
- フォレスト、そしてネイチャーポジティブ“文脈で他地域での展開、連携を想定
 - コアメンバーとして動けるリソース確保が課題

3.1 立上げ・実践プロジェクトの概要と成果、今後の見通し (3) 「地域GX・経済循環」支援・共創事業体づくり - ①プロジェクト概要

■ 地域GX計画をデータとLCA & IOA*で加速する情報基盤「RE-CODE」の事業化 (LCA=Life Cycle Assessment, IOA=Input-Output Analysis, 産業連関分析)

- 【背景】:多くの自治体がゼロカーボン宣言など目標を公表するも、具体的な実行計画をもつ自治体はわずか
 - GX推進には技術導入が不可欠。昨今は多くの補助事業で申請時にLCAによる導入効果の試算が必須化。
 - 考えられる原因: ◆地域や技術の情報が分散または不足 ◆専門家への委託は高額&人材不足 ◆LCAのハードル
- 【解決策】: 情報技術による地域GX計画の加速化 → 事業化により本格展開を図る
 - 地域の強みとなる資源情報(再エネや廃棄物)の一元化
 - 地域資源を活かせる技術の提示(技術の組合せを含む)
 - 技術導入による物質・エネルギーフロー変化のシミュレーション
 - LCA, IOAをベースとした技術導入効果の評価
 - これらに必要な基盤DBを統合&順次拡張



3.1 立上げ・実践プロジェクトの概要と成果、今後の見通し (3) 「地域GX・経済循環」支援・共創事業体づくり - ①プロジェクト概要

地域に向けた支援

- 地域の強み・特性がわかる
- 強みや特性を活かせるGX技術がわかる
- GX技術の導入効果がわかる

技術開発・普及の支援

- 保有技術の強みをアピールできる
- 技術の強みを活かせる地域がわかる
- 地域ごとの技術導入効果がわかる

地域と技術をつなぎ
GXを加速する

地域GX技術の導入計画を支援・加速

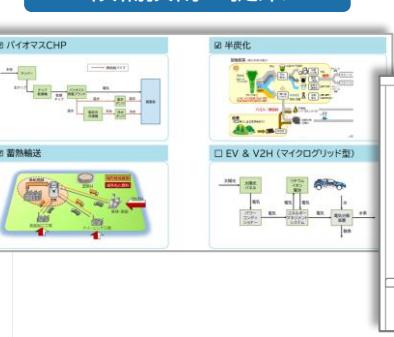
地域資源の可視化



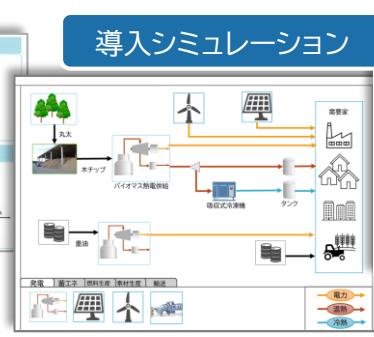
エネルギー需要の可視化



候補技術の提案



導入シミュレーション



技術導入効果の評価



3.1 立上げ・実践プロジェクトの概要と成果、今後の見通し (3) 「地域GX・経済循環」支援・共創事業体づくり－②成果、今後の見通し



■ 成果；今年度の到達点－プラチナ社会実装・産業共創具現化への貢献のポイントと課題

<具現化への貢献のポイント>

- 地域や技術開発者の潜在ユーザーにコンセプトを伝え、共感を呼び、コミュニティの創成と拡大を目指す
 - データソースや事例を蓄積 → 機能や対象の拡張 → さらにユーザー獲得 …のスパイラルアップ [コンセプトづくり]
 - 明確にシンプルに伝わる(学術向けではない)プロモーション資料の充実化 [デザイン開始]
 - 既存コミュニティへのアピール (例：プラチナ構想ネットワーク「再エネ産業イニシアティブ」) [連携の議論を開始]
 - 実例の積み上げ (COI-NEXT東大拠点の連携地域などの展開) [複数候補地域と面談]

<課題>

- 開発リソースの不足と分野間の知識ギャップ
 - LCAと情報技術の知識はいずれもあるといど必要だが、両方に精通した人材は皆無に近い。
 - ITベンダーへ外注するにも、理解を得るまでに相当な労力と時間が必要。
- 事業体人材の獲得
 - 開発と同様の悩み。まずはコンセプトを広めて賛同者を探す必要あり。[SUNDREDを通じて候補者面談に着手]
 - SUNDRED「Industry-UP Day」(3/12)で東大兼松が登壇

3.1 立上げ・実践プロジェクトの概要と成果、今後の見通し

(3) 「地域GX・経済循環」支援・共創事業体づくり－②成果、今後の見通し



■ 今後の計画、見通し

- 前年度まではツール開発に注力していたが、本年は事業化計画を本格化した
→ 2025年度前半に事業体を立ち上げ予定
 - 【土台づくり】創業メンバーの確定／プロモーション資料の完成／事業体＆サービスのウェブサイト開設
 - 【運営】受託などの開始／テスト的なサービス提供とフィードバック／開発の加速
- プロモーション
 - プラチナ構想NW「再エネ産業イニシアティブ」での展開
 - 既存LCA関連団体やデータベース開発者との連携
- 事業展開
 - 地域や企業との具体事例のコンサルティングを通して、データやシミュレータの充実化
 - RE-CODEを使った地域GX計画のトレーニングと人材育成
 - GX技術を開発する企業やウェブ公開情報から技術情報を集め、カタログ化
→ 地域－技術間のマッチングへの展開

3.1 立上げ・実践プロジェクトの概要と成果、今後の見通し (3) 「地域GX・経済循環」支援・共創事業体づくり



補足；本プロジェクトの「プラチナ森林産業」社会実装・産業共創における位置づけ、意義

■ 本プロジェクトの位置づけ

- 具体的な拠点等における社会実装プロジェクトではないが、広範に社会実装を誘起、支援する、基盤的役割を担う重要なプロジェクト
 - 「プラチナ社会実装・産業共創」具現化には、極めて多様・多数な実践者・関係者の参加、貢献が必要、それを促し、建設的な対話、議論を行うための共通言語となる
 - より効果的なソリューション、トータルデザインの設計、開発、具体導入を促進する仕組み、基盤となる
- 具体的な拠点等での大規模な社会実装プロジェクト以外にも、それらの基盤、PFとなる事業づくり（本件）、萌芽創出・トリガーとなるスタートアップ創出なども含め、プラチナ社会実装・産業共創エコシステムづくりが大事

■ プラチナ社会実装・産業共創推進基盤としての適用イメージー社会実装・産業共創の加速、自律化へ

- 個々拠点での社会実装プロジェクトの設計・シミュレーション、コンセンサス形成、実践・運営を支援する基盤
- より効果的なプラチナ社会実装ソリューション、デザインの基盤
- 上記を支え、自発するコミュニティづくり、アセットを持つプライヤーへの求心力、実装運営における共通言語

3.2 「プラチナ社会実装化モデル」のアップデート

■ 実践を通じて得られたアップデートのポイント

- ・ モデルv1のコンセプト、骨格の意義、有用性は、実装・産業共創プロジェクト推進者の中で確認、共有された
- ・ モデルv1実践を通じ、主に以下のような観点でのモデルアップデートへの示唆が得られた
 - ・ モデルが想定する「ステップ（フェーズ）」の柔軟性の明示的・実効的な記述が必要 – 「何度も更新しながら進む」ことが特徴
 - ・ 「仕掛け人」「コアチーム」に加えて、協力者（「準メンバー（仮称）」）の存在の重要性
 - ・ エコシステム形成と事業投資・成長との摩擦を突破する仕組みの必要性
 - 例：投資家は事業の成長を求める一方で短期的に利益を生みにくいエコシステムの形成は前向きになりにくいという現実の突破
- ・ 加えて、「社会実装がスタックしやすい」場面の典型も浮き彫りになり、それらの克服策・手段の盛り込みも必要

■ 最新の「社会実装研究」での論点、それからの示唆

- ・ 実装・変革主要コンポーネント・レイヤーを繋ぐ、マルチパースペクティブ（グローバル・ローカル等）を統合する、が課題として認識、これらを具現化・牽引する主体としての「中間活動体」の必要性、重要性に注目すべき
 - ・ 社会実装を意図的に興すには、ニッヂ（革新ソリューション）-レジーム（社会態勢・構造）-ランドスケープ（未来ビジョン・アジェンダ）の3つを連動、好循環、させていくことが重要
 - ・ それを牽引する主体が不明確、不足 – 必ずしも、行政や大企業が（単独で）レジーム変革を牽引していくことは困難
- ・ また、複数専門領域の学術知見を「社会実装」で統合することで「主体」「アクティビティ」の構成・要素のアップデート、基本原則づくりの可能性・必要性などへの示唆も確認（後述、Appendix参照）

→ 上記を織り込み、「プラチナ社会実装化モデルv2」としてとりまとめ、更なるアップデート論点を整理した₄₀

3.2 「プラチナ社会実装化モデル」のアップデート

■ モデルv2における主なアップデートポイント

追加項目		意図
主体群	中間活動体	社会実装や新産業創出を進める際、ステークホルダー間（企業・大学・行政・住民など）をつなぐハブの存在が重要であることが各地の事例で明確になった。
	準メンバー	社会実装プロジェクトの現場では、フルコミットではないが、「部分的」「時期的」に重要な役割を果たす人々がいた。「準メンバー」と位置づけることで、柔軟で幅広い協力体制をモデルに反映。
アクティビティ群	リサーチ・関係構築	社会実装を円滑に進めるには、事前の深い現場理解や関係者間の信頼構築がその後の進捗においてもキーとなることを強調。
	創発観察・適応	社会実装プロジェクトでは、当初の計画通りに進まないことが多い、現場での試行錯誤を繰り返しながら状況に応じて柔軟に対応が必要。現場で生まれる予期せぬ成果や問題を敏感に観察し、迅速に適応していくプロセスを重視するため追記。
	プロトタイピング	プロジェクトを成功させるためには、早い段階から小さな試作やテストを繰り返すことが有効です。このような小規模な試行を明確に取り入れ、フィードバックを得て改善を図る活動を、プロジェクト進行プロセスの中核に位置づけた

※変革を後押しする集合体と中間活動体との相違点について

- ・ 変革を後押しする集合体：地域等と緩やかに繋がる支援ネットワーク、幅広い関心層、専門性を持つ層で構成され、プロジェクトを間接的に支援
- ・ 中間活動体：具体プロジェクトの実践・実装支援、運営する活動体であり、深い関与をもって伴走－各主体、ランドスケール・レジーム・ニッチを繋げ、好循環を創出

3.2 「プラチナ社会実装化モデル」のアップデート

参考；活動を通じて浮き彫りになった「社会実装がスタックしやすい」場面の典型例
– モデルv1におけるアクティビティセグメント毎に主要なものを例示

アクティビティ	スタックしやすい場面、理由
未来ビジョンの共創	<ul style="list-style-type: none"> ・抽象的な“理想論”に留まってしまう。 ・対話不足で一部メンバーだけがビジョンを抱えている。 ・合意形成が難航し、時間だけかかる。
リソース調達	<ul style="list-style-type: none"> ・初期資金依存のやり方で動きにくくなる。 ・人材・協力者の不在。
自律コアチーム組成	<ul style="list-style-type: none"> ・一極集中型リーダーへの依存 ・コアメンバーが“タスク要員”的に扱われ、主体性が生まれない。 ・抵抗や反発にあいチーム組成が難航。
仮説の構築・検証	<ul style="list-style-type: none"> ・仮説を立てず動き出し、トラブルが続出する。 ・失敗を引きずりすぎて検証サイクルが止まる。
実践チーム・体制の組成	<ul style="list-style-type: none"> ・体制設計が曖昧で役割分担・責任が不明瞭。 ・過度な管理、大量の会議でチームが疲弊
プロジェクト実装・推進	<ul style="list-style-type: none"> ・クレーム・内部対立への対処が後手。 ・合意が遅く、意思決定スピードが出ない。 ・実務担当に負荷が集中する。
エコシステム形成	<ul style="list-style-type: none"> ・各事業者の“点”的成果に留まってしまい、連携が生まれない。 ・ステークホルダーの利害が一致しない。

3.2 「プラチナ社会実装化モデル」のアップデート

参考；複数専門知見、実践知の統合により得られた視点、考察

– 主に経営学・社会学研究者等との対話・理論、そして実践・インタビュー両面から（具定期な考察はAppendixご参照）

視点1；主体群－「仕掛け人」の成長 / 発達

- プラチナ社会実装の長期プロセスにおいて、仕掛け人の役割は固定ではなく進化する—具体的には、初期は「熱血リーダー」が必要でも、成長期には「対話促進」、成熟期には「育成・権限委譲」へと変化することが明確になった
- 「仕掛け人」、そして「コアチーム」の要件における重要なモデルアップデートポイントと考えた

視点2；アクティビティ群－トランジション・デザインの視点導入

- インタビュー結果に見られる「非線形な進行プロセス」に適合するフレームが必要
- かつ社会システムの構造的变化を促す「中間活動体」の役割を理論的に裏付け、プラチナ社会実装モデルの学術的基盤を強化する必要もあると考えた

視点3；アクティビティ群－心理的安全性構築プロセスの明示化

- インタビュー結果からはチャレンジを奨励する文化や失敗からの学びが成功要因として浮かび上がった
- 多様なステークホルダー間の協働や長期的取り組みには信頼関係が必須であると考えた

視点4；アクティビティ群－「センスマイキング理論」を適用した定例ミーティングのアジェンダ設計

- 昨年度のインタビュー結果からも効率的なプロジェクトマネジメントにおいて定例ミーティングの存在が重要であることが明らかになった
- また、それぞれのコアチームが無意識的にミーティングのアジェンダ設計をテクニカルに実施しており、汎用的な手法に落とす必要があると考えた

補足；「スタートアップ」、「健康・自立領域」での追加検証

—モデルv2へのバージョンアップへの補完、さらにv3を見据えた論点抽出に向けて



■ 追加検証の目的と対象

- プラチナ社会づくりへの産業領域拡大、社会実装・産業共創のアプローチ多様化の必要性に鑑み、本年度実装プロジェクトとは異なるタイプの2事例（プラチナ社会実装型スタートアップ、健康・自立（森林以外）事業）を対象として、追加検証を実施
- 具体的には、実装化経緯・要因、現在の状況などにつき、モデルv1フレームワークを適用し、モデルの有効性検証とアップデートのポイント探索を行った
- 検証対象とした事例概要は、以下の通り

事例1；FURANWOOD・津山市（2024年プラチナ大賞・総務大臣賞）<<https://furanwood.com/>>

- 国内林業の課題解決を目指して、2018年に創業したスタートアップ
- 創業者小原富治雄氏のビジョンの下、京都府立大学等と連携して独自のフラン樹脂加工技術を開発
- 2022年に社名を変更し、「森と街を美しく」を理念に、国産材の付加価値向上と持続可能な森林再生に挑戦

事例2；アスタネ（さいたま市）<<https://www.asutane.jp/>>

- 株式会社ゼネラルパートナーズが運営する就労継続支援A型事業所であり、障がい者、特に精神障がい者長期雇用を実現するためのモデルの確立、具体的な実践活動、事業を推進
- そのための事業の中核として、しいたけ栽培を行い、農業を活用した持続可能な障がい者雇用の仕組みを構築
- 精神障がい者の雇用支援のノウハウ蓄積を目的としながら、最終的に独自のビジネスモデルを開発、農業生産-販売-支援活動を一体化させた経済的にも自立可能な事業へと発展

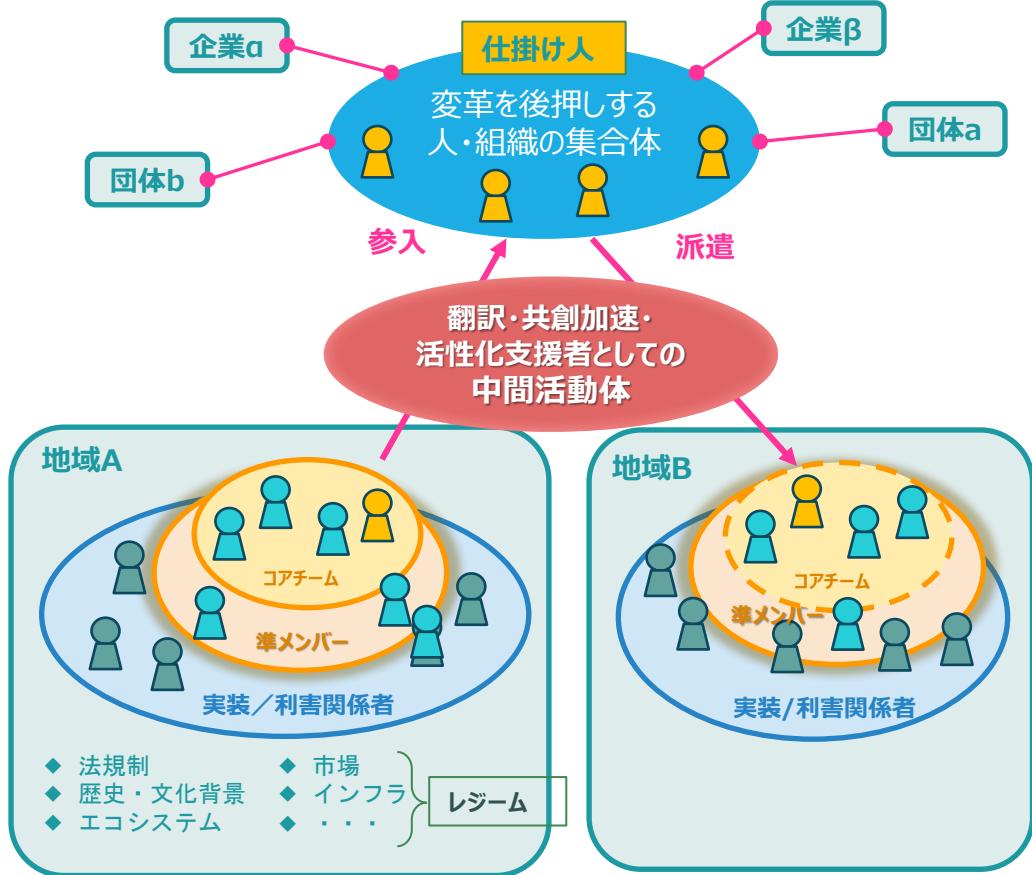
■ 検証結果概要

- プラチナ社会実現に資するスタートアップ、健康・自立領域においても、モデルv1フレームワークの有効性は確認できた
- 「主体」「アクティビティ」の各論、前提となる活動・進め方の基本原則などで、アップデートにおける重要事項も抽出された
→ モデルv2へのバージョンアップへ、更なるアップデート論点として反映、活用



プラチナ社会実装化モデル ver.2

主体群－中間活動体、準メンバーを付加



- 变革を後押しする人・組織の集合体
- プラチナ社会実装へのパッションを持ち、それに必要な多様な専門知・スキルを保有する
- 目的志向で、所属組織を越境し活動する（コアチームにも適宜参加、関与する）

- 社会の変化やニーズを把握し、地域におけるさまざまな団体の活動や団体間の連携を支援する

- 地域・社会課題への強い問題意識を保有
- 様々な障害、所属組織等の制約なども超えて、自ら実践、地域・プロジェクト等を牽引
- 正式なコミットメントはないが興味関心ベースで参加し、必要に応じて協力する層（準メンバー）も必要なフェーズが存在する

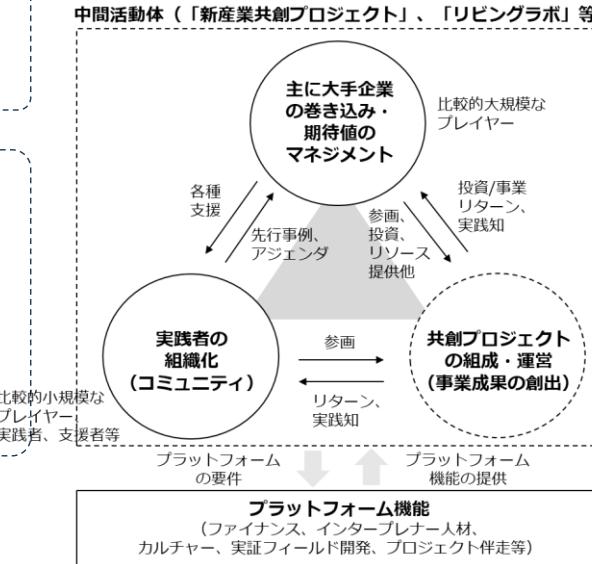
- プラチナ社会実装に必要な資源を保有
- コアチームとともに、社会実装を実践

補足 ; 「中間活動体」モデルと必要なケイパビリティモデル (by SUNDRED株式会社)

- ・ 多様な形式の中間活動体（一般社団法人化を含む）の組成および持続性獲得のノウハウ
- ・ 対話・共創の場の開発プロセス・運営スキーム、および実践知・経験知
- ・ 热量の高いコアチームの形成

- ・ 多様な分野における対話・共創活動のデータ化・蓄積およびAIによる文脈形成、共感度の高いアジェンダ、エコシステムのパターン化
- ・ 組織を超えて社会起点で対話・共創を推進していく「インターブレナー」のコミュニティ、ネットワーク
- ・ 情報共有・ネットワーキング・学び/気づき等、ライトな目的のメンバーでも飽きないコミュニティマネジメント

- ・ クラウドファンディング、スタートアップ、トークン等、多様なファイナンススキーム
- ・ 地域（自治体、地域企業・コミュニティ）の巻き込みのノウハウ、経験・信頼



- ・ 適切な大企業へのアプローチ、巻き込み
- ・ **企業経営経験者**による大手企業経営層へのアドバイス
- ・ 大手企業向けの付加価値の高い**事業創出支援、コンサルティング**の提供
- ・ **組織内のインターブレナー**（共創人材）のあぶり出し、巻き込み

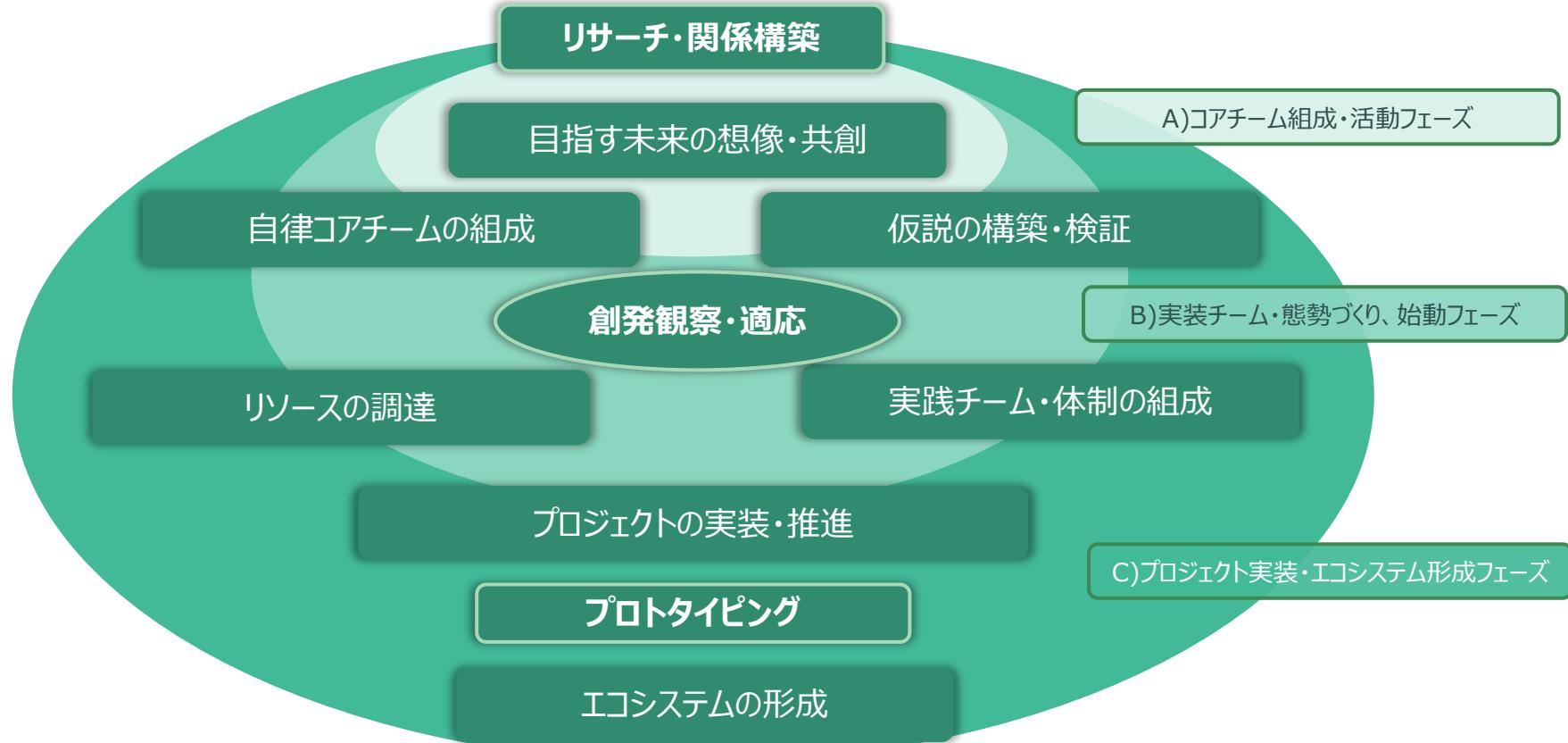
- ・ 各分野の強力な**有識者のネットワーク**



- ・ アカデミアとの共同開発による「新産業共創プロセス」にもとづく**骨太なプロジェクト創出・推進**
- ・ 合理性の高い「つながったソリューション（エコシステム）」、「トリガー事業」の構想
- ・ **スタートアップの設立・アクセラレーション、新規事業開発**のノウハウ、経験

- ・ 自律した「インターブレナー」が集い、成果を出していくための**インターブレナーカルチャー**
- ・ 実際の活躍事例から導き出した「インターブレナー」の**コンピテンシーモデル**、完成度の高い育成プログラム

- ・ 柔軟性の高い**プロジェクトマネジメント、ファシリテーション**
- ・ **プロジェクト伴走支援者、PM、PMO**のネットワーク



現地理解、ステークホルダーとの対話を通じて、課題を本質的に理解し、後のフェーズのスムーズな進行につなげる。

- ・ プロジェクト開始前のリサーチ・関係構築すべてが明らかにはなりえない。
- ・ 例えば地域での慣習などの暗黙のルールは、実施したことへのリアクションとしてわかることがある。
- ・ また、リサーチ・関係構築については、のちのアクティビティ群でのトライリストにあるように、常に実施されているものだと解釈される。

トライリスト

- 現場の生の声・状況を把握するための徹底した対話・ヒアリング
 - 先進事例や関係者に訪問し進行の要点をつかむ。
- ステークホルダーを洗い出す。
- 保守的になりうる関係者には早めにコンタクトをする。
 - 地元に昔からあるコミュニティ組織や町内会役員等にあいさつをしにいく。

起点となる問題・課題やアイデアをきっかけに、リサーチ・内省を通してビジョンや価値観、行動指針等に落とし込む

トライリスト

- 合宿、先進地視察など集中的に検討できる場をつくり、最少人数で絞り込む。
 - ビジョン合宿を多くこなした。3人で何度も繰り返す。
 - 共同で事業を行うメンバーで熱供給事業の先端地であるヨーロッパへ視察に行った。この際に地域資源が循環する様子を目にするなど多くを学んだ。
 - 多様なバックグラウンドをもつ“準メンバー”を巻き込み、別視点からビジョンを進化させる。（横瀬/モリジエネ）
- どのような思考・プロセスを元に進めていくのか初期メンバーで認識を揃える
 - まずは自分たちの手持ちのリソースやアセットでどこまでできるのか考えた。
- マイルストーンは1、2年単位ではなく、5、10年単位で仮置きする
 - まずは3年間のロードマップを引きながらも、10年先も見据えていた。林業自体すぐにエコシステムを変えることは難しい。
- ビジョンを常に立ち返れるように意識しておく。
 - 創業当初は「まず黒字にする」が優先だったが、数年経ってから改めて社会的意義を確認して立ち返った。（アスタネ）

多様・固有なアクティビティ

- 明確なゴールと、実現するためのプロセスモデルを最初の段階でつくりあげる
- 明確なゴールは置かずに多角的なビジョンステートメントを設定。
 - 会社の創業の理念を参照して自分たちの理念を設定する。（アスタネ）
 - 創業者のアイディアを記したメモをもとに落とし込んでいく（フランウッド）
 - 専門家の意見を取り入れ集約する（森林資源）

今自身が保有している資源を整理し、明らかに不足している場合は調達に動く

トライリスト

- 自分たちが使えるリソースを整理し、現状のリソースで進められる範囲を明らかにする
 - ・ 会社の自己資金で実施できる範囲を明らかにする。公的資金が必要でないことがわかった。
 - ・ 社長が過去に所属していた会社の人脈を通じて人材を採用。（フランウッド）
- 資金調達先を調べ、資金調達スキルの高い人を仲間にする
 - ・ 専門部隊を置き、事業、補助金などの情報収集体制を構築した。
 - ・ 申請書作成に慣れている「作文の上手い人」が重要。
- 繼続的に資金を調達する体制を構築する
 - ・ 設立前にニーズ調査や事例検討を行い市民のコミュニティ財団を設立。事業者が次のステージに行けるように&人を巻き込む仕組むを作っていく必要があった。気持ちよく応援できる&最初の一歩を踏み出しやすい仕組み。
 - ・ 公設塾学習センターの運営は、月謝だけでは経済的な自立はできない。学習センターの法人化とともに、新たな収益事業とファンドレイジングによる資金の安定化に取り組んでいく。
- 個人ベースの共感を基点にした体制づくり
 - ・ 専門知識より情熱レベルでメンター選ぶ。
- フェーズに応じた資金調達を進める。
 - ・ 研究開発段階は補助金、助成金を活用。事業拡大段階では投資家含めた多様な資金調達を検討。（フランウッド）
 - ・ 初期段階の資金をどう確保するか。メンバーの持ち出しで対応。（森林資源）

目指す未来に共感する自律的な（リーダーシップをシェアできている）なコアチームを組成する

トライリスト

- コミュニケーションの種類（議論、討論、対話、FB etc..）によって場を設計。特に対面の場を重視し、いつでも対面でコミュニケーションが取れるようにする
 - 定例ミーティングは信頼関係をつくるタイミングでもあるので、基本的に対面で実施。
 - 定例ミーティングを実施しない代わりに、コミュニケーションラインは詳細に整備した。
 - 同じ建物に2つの関連団体施設あり。センターの設立(2012)と同時に場所をひとつにした。
- 地域内の力学を考慮した手順で組織体制を構築する
 - 民間だけだと自治体の協力が得にくい。広域連携の場合、どの自治体が旗を振るかは重要。
 - 商工会が肝となった。商工会が賛成であれば、市町村は反対しにくい。森林に目を向けるというのは今までなかつたし、森林という公共財に反対する理由はなかつた。
- チャレンジに寛容的な姿勢を保ち、「いいね」と伝える・受け取ることができる環境をつくる
 - 肌感覚では寛容度が高くなり、新しいチャレンジに対して「あれは何だ？」と興味を持つ人が増えている。チャレンジが増えることで別のチャレンジへのハードルが下がっているかも。若者の姿を見て大人も刺激を受けている。
- 「準メンバー」や「周辺協力者」を意図的に育てる。
 - コアメンバーと周辺メンバーが混在できる“緩やかなコミュニティ”的場をオンライン／オフライン両面で設ける（横瀬／モリジエネ）
- リーダー依存度合をモニタリングする。
 - 権限移譲項目をチェックリストにして確認をする。（アスタネ）

エコシステム仮説を構築し、ユーザーのペインポイント、ニーズの存在、最低限の実現可能性を検証する

トライリスト

- 仮説は、多様な立場のメンバーと議論を進めて作り上げる
 - 初期仮説（循環の輪モデル）はアドバイザーである大学の先生とPLがつくり、地域事業者等に当てながらつくりあげた。
- 仮説の検証は素早く行う
 - プロジェクトを細分化し、まずは動かすことを心がけた。
 - デザイン思考のプロセスでプロジェクトを進行した。
- 試行の現場を設定し、深くコミットする（時期をつくる）
 - 最初は広域連携、最終的には自身が管轄する自治体に絞って地域事業者と向き合った。
 - 自身が岩見沢市に住む、住んでる人が楽しめることをつくることを意識。
- デスクトップリサーチや定量リサーチより、定性リサーチ(生の声を聞くこと)に時間をかける
 - 人が集まらなかろうが、何度も地域で検診会を実施。実際の参加者と対話を重ねていった。
 - 他の事例にアポを取って回り、どこが成功しているのか直接見ることで“何が違うのか”を徹底的に検証した（アスタネ）
- 抵抗要因をあらかじめ予期した仮説を作成する。

多用固有的なアクティビティ

- 日本国内に参照するものがないため、米国の事例や基準を参照した。（フランウッド）
- 対話ツール（MIRO）を使い、準メンバー等も交えて仮説を作る→コアチームが収束”を繰り返す（モリジエネ/横瀬）

エコシステム形成の一歩目となる、参加者が「**双赢**」の関係を築けるようなグランドデザインを描く

トライリスト

- 志を確認し、敵となる可能性はあるが近しい人は早い段階で味方に変える。一方で志が異なる場合は早めに関係性を再考する
 - 本気の「上から目線」：地域住民がどうやったら喜ぶかと一緒に考えてくれないなら受け入れないという姿勢、地域のことを本気で考えててくれる企業であることを条件としている。継続的に一緒にやっていく志を大事にしたい。企業チャレンジが子供、大人につながるように意識している。慎重に見極めて進めている。囲い込みみたい相手にはこちらから積極的に働きかける。
 - 市町村も巻き込んだ体制をつくっていたが、方向性が異なることがわかり、単体で動く。
 - 林業で所有者が多い場合、「不在地主」問題を抱えるエリアがあれば行政とも連携しつつ早期にクリアする道筋を探る。（森林資源）
- 巻き込む際に見せる絵を変える（言葉や態度、問い合わせを変える）
 - 商工会が肝となった。商工会が賛成であれば、市町村は反対しにくい。市町村も商工会にお世話になっている。商工会同士の連携がなかった。森林に目を向けるというのは今までなかっただし、森林という公共財に反対する理由はなかった。（この段階でキーパーソンが移住することに決めた）
 - 10年前：勝手にやってると思われないように気を付けていた。現在：同じ日に同時にイベントが自然発生的に起きているようになっている。
- “余白”仕掛けで新たな仲間・支援者を呼び込む
 - イベントを通じて参加者や賛同者が自然発生的に増える。（モリジエネ/横瀬）
 - 視察や見学等での来訪を積極的に受け入れる。来訪者との新たなプロジェクトが創発された（アスタネ）

多様・固有なアクティビティ例 1

- 民間だけだと怪しまれる。行政側に幹事になつてもらう

多様・固有なアクティビティ例 2

- 補助金に頼らない、できる限り民間主導で行う

エコシステムを形成する上でのプロジェクトを実装。マイルストーンを設定しプロジェクトを推進する基盤を整え、動かす

トライリスト

- 定例ミーティングを意思決定サイクルの中心に設計する
 - 1週間を1サイクルとし、週1回の打ち合わせの中で必ずアクションに落とした。
 - 月1回の打ち合わせでサイクル回す。ミーティング後には必ず飲み会を設定し、ミーティング内で決まらなかつたことも飲み会で決める。
- 意思決定ができるだけ迅速に行う（チームにも文化として根付かせる）
 - 自分自身も意思決定はできるだけ早く行うようにした。チームメンバーにも失敗の責任は自分が背負うので、意思決定のスピードは重視。
 - 週1回の打ち合わせの中で必ずアクションに落とした。
- 初動では人や時間、お金などの資源を分散させず、核となる活動に注力する
 - 11個のプロジェクトを立ち上げたものの優先度付けを行い、最終的には2-3個に絞った。
- 実装フェーズでも中間活動体や変革を後押しする集合体との連携は継続する。

多用固有的なアクティビティ

- 対面の場を重視、基本的に意思決定は必ず対面の場で行う。
- オンラインの場を重視、オンラインでも意思決定ができるように場を設計する。
- スタッフをリーダーに任命し、権限移譲。権限移譲するものについてマニュアルを作成する。（アスタネ）
- 部署ごとではなくアジェンダごとにミーティングを設定する。（フランウッド）
- 実装フェーズでも中間活動体や変革を後押しする集合体との連携は継続する。

エコシステムにおける実装可能なプロトタイプ[°](小さく早くやってみること)を定義・実装し、改善サイクルをまわす

トライリスト

- 定期的にユーザーからのフィードバックを得る仕組みをつくる
 - 自分自身もスタッフに対してフィードバックを行うが、お客様からスタッフにフィードバックが直接届くようにしている。
 - プロのインタビュアが客観的な立場で質問を訊くことにより仮説が明確になった。
- 手間をかけずに複数のバージョンをつくってみる
 - まずはイメージをつけてもらいフィードバックを得るために手書きのプロトタイプ[°]を作成してみた。
 - 段階的に試験し、うまくいったものを導入していく。（アスタネ）
- プロトタイプへのネガティブなフィードバックから目を背けずに前アクティビティに立ち戻る
 - 試しに店頭に飾ってみたところ、近隣住民からクレームが殺到。表に現れていない地域のしきたりを理解することができた。フィードバックを得て別のかたちで実現することができた。
 - 現場で不具合が起き、クレームを多発。これを一つひとつ検証し、施工ガイドを整備することでトラブルを減らし、改良を積み重ねた。（フランウッド）
- “面白そう”というマインドを大事にする。
 - 大型の事業計画を作り込むより前に、「ちょっと試してみたい」と思ったら実践してみる。

プロトタイプのフィードバックを踏まえ、エコシステムの構築をコンソーシアムの拡大・推進を通じて加速し、世に届ける

トライリスト

- 関連情報をキャッチアップできる状態は整え、コラボレーションの可能性を探る
 - チームメンバーである副社長はプロジェクトの中で渡り鳥のように他のコミュニティを行き来する存在。アクティブに動き企業との連携・サブプロジェクトの組成に寄与していた。
- **公共性を担保したエコシステムを構築する**
 - 銀行ルールと同じく誰も5%株を持たないことが重要。誰かの企業となってはいけない。市町村から支援を得るために、森林が公共財であるため。
 - **自社で行うのではなく、公共性のある別の団体の組成を検討。**
- 投資対効果を意識しながら、持続的な好循環を設計していく
 - 基本的には公的資金は使わない。マーケティングも口コミでの伝播を設計し最小限に抑えている。

多様・固有なアクティビティ

- ベンチマークを徹底的にリサーチし、横展開できるモデルを構築する。
- 先行事例をあまり参考にせず、地域性があるためモデル化はしない。
- **事業内容（シイタケの製造）だけではなく、事業の在り方（雇用）を広げていく（アスタネ）**

4. 「プラチナ社会実装化モデル」の普及と社会実装・産業共創への取り組みの喚起

4.1 プラチナ構想NW会員向け、イベントを通じた活動

■ プラチナ構想NW諸活動を通じ、意思・意図を持ち「**プラチナ社会実装・産業共創**」を興すための共通言語、型としての「**プラチナ社会実装化モデル**」の発信・普及を実践

- 会員400団体超／うち自治体首長会員約220名からなる組織、多様・多数の共有・共創活動を展開中



Platinum Society Network Monthly News
マンスリーニュース

2024年9月号

◆[9/18～9/20]プラチナ森林産業イニシアティブ FORESTRISE2024へ出席しました
9月18日(水)～20日(金)にかけ、FORESTRISE2024（第4回次世代森林産業展）へ出席しました。当会ブースでは、「プラチナ森林産業イニシアティブ」活動や、当イニシアティブ参加団体の取組等をご紹介いました。また、18日(水)は、会場内で当会主催セミナーも実施し、いずれも100名を超える方にご聴講を頂きました。当会ブース並びにセミナー会場へのご来場に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

<セミナー概要>

内 容	ご登壇者
基調講演	プラチナ構想ネットワーク会長 小宮山 宏
パネルディスカッション①	トキヤマ代表取締役社長執行役員 横田 浩様 東京大学環境安全研究センター長・教授 辻 佳子様 ニチハ常務執行役員 吉田 康則様 シエルターネットワーク取締役 安達 広幸様 プラチナ構想ネットワーク顧問 鎌形 太郎
パネルディスカッション②	森林研究・整備機構森林総合研究所 久保山 裕史様 京都大学農学研究科教授 立花 敏様 サークルホールディングス代表取締役社長 中村 正治様 アルファフォーム代表取締役 小林 嘉尚様 アジア航測西日本国土保全コサルクト技術部課長 小川 豪司様

◆公式 HP : <https://www.forestrise.jp/2024/index.html>



Platinum Society Network Monthly News
マンスリーニュース

2025年2月号

◆[1/31]九州支部第3回フォーラム、第132回プラチナ懇談会を開催しました

1月31日(金)、九州支部では第3回となるフォーラムを熊本市にて開催しました。

今回のフォーラムでは、「ライフルグ・ラーニング in 九州」をテーマに、当会会長・小宮山による基調講演に加え、日本銀行熊本支店 支店長 田原謙一郎 様による特別講演を行いました。さらに、会員企業・自治体の方等をお招きし、「学びの視点から地域創生を考える」をテーマにパネルディスカッションを実施。会場には約100名の方々にご参加いただきました。フォーラム終了後には、熊本市内にて第132回プラチナ懇談会を開催し、九州での「プラチナ社会の実現をテーマに意見交換を行いました。

ご参加いただいた皆様、誠にありがとうございました。

【フォーラム登壇者】(ご所属名 50音順)
江頭 実 様 菊池市長
宮地 勝 収 様 株式会社教興と探求社 代表取締役社長
永田 俊 史 様 株式会社まことKDS グループ 代表取締役
田原 謙一郎 様 日本国銀行熊本支店 支店長
長澤 光太郎 様 一般社団法人プラチナ構想ネットワーク 理事 (モレーター)
【第132回プラチナ懇談会出席者】(50音順)
青山 真実 様 合同会社 Blue 代表社員
井原 宏 稔 様 ㈱本川の駆動車株式会社 代表取締役社長
江頭 実 様 菊池市、市長
笠原 鶴久 様 株式会社肥後銀行 代表取締役頭取
木下 大 様 株式会社九電工 執行役員 事業開発部長
小牧 祐 様 ㈱開拓電機製作所 取締役常務執行役員
田中 勉 様 日本国銀行熊本支店 支店長
横尾 勤 様 株式会社まことKDS グループ 代表取締役
永田 伸一 様 株式会社エコシステムズ 代表取締役社長
横尾 勤 様 株式会社江之菱 UF 銀行 熊本支店 支店長
小宮山 宏 様 一般社団法人プラチナ構想ネットワーク 会長
長澤 光太郎 様 一般社団法人プラチナ構想ネットワーク 理事
幕 幸二 様 一般社団法人プラチナ構想ネットワーク 九州支部長

■ プラチナ社会実装・産業共創の軸「**プラチナ産業イニシアティブ**」での発信・普及、浸透に注力

参考；第12回プラチナ大賞×「プラチナ森林産業」

大賞・総務大臣賞



団体名：株式会社フランウッド、津山市

取組名：森林基幹道とフランウッドによる Profitable & Sustainableな森林業—森林基幹道というインフラ投資とフランウッド（木材高付加価値化技術）と森林経営管理責任を持つ地方自治体と共同の取り組み

優秀賞 新しい時代の森林活用賞



団体名：小諸市（長野県）、一般社団法人ディバースライン

取組名：ウエルネスシティ信州小諸 Project – with MORIBITO

～森林環境も社会課題も担い手も多様性の組合せで～

4.2 プラチナ社会実装・産業共創の仲間・コミュニティづくり

- 実装プロジェクト主体・牽引者へのプラチナ社会実装化モデルの共有、それを共通言語としたプラチナ社会実装・産業共創への対話の進展
 - プラチナ「森林産業」共創を牽引する主要関係者が集い、ビジョンと実践知等を共有、対話し、プラチナ社会実装加速が促進された – 共通言語として「プラチナ社会実装化モデル」が機能した
 - さらに、外部イベントへの参画、对外発信等により仲間・コミュニティの拡大にも取り組んだ
- 「プラチナ社会実装化モデル」アップデートと「実践・試行錯誤」の相乗・好循環を産み出す場の構築
 - モデルを共通言語、ツールとしながらの実践、そのフィードバックを踏まえたモデルのアップデート、新たな実装への取り組みを産み出す場が創出された
- 実践・立上げを通じたプロジェクト関係者への実装化モデル、プラチナ社会実装・産業共創の浸透
 - コアチーム等を通じて、プラチナ社会実装・産業共創の意義、そして、方法論・ツールとしての「プラチナ社会実装化モデル」が浸透した
 - 自律的なプラチナ社会実装・産業共創へのコミュニティづくりの端緒となった
- 第二弾の「プラチナ再エネ産業」、それに続くテーマも含め「5つのプラチナ産業共創・イニシアティブ」の設計への「プラチナ社会実装化モデル」の適用・活用

参考 ; FORESTRISE2024（第4回次世代森林産業展）への出展

ブース出展

開催概要

会期 : 2024.9.18(水)~20(金)
10:00~17:00

会場 : 東京ビッグサイト 東ホール
主催 : 産経新聞社

ブース企画

- ① ビジョン紹介の他、40社超の企業ロゴを掲載した参加団体パネルを掲示
- ② 参加団体の取組紹介パネルやチラシの掲示 : 16社によるご協力
- ③ セッションの実施 : 3社（ニチハ、四門、大林組）によるご協力
※ブース内交流等を契機として新たに複数団体がご参加！

展示会来場者数等

出展社数 : 73社・団体 (78)

小間数 : 74小間 (97)

() 内は前回2022年実績



FORESTRISEセミナー

いずれも100名超
の方がご聴講

日 時	2024.9.18(水) 13:00 ~ 16:00
基調講演	森林資源のフル活用によるプラチナ社会の実現 プラチナ構想ネットワーク会長 小宮山 宏
パネル ディスカッション ①	「ビジョン2050 日本が輝く、森林循環経済」と推進戦略 ・トクヤマ代表取締役社長執行役員 横田 浩様 ・東京大学環境安全研究センター長・教授 辻 佳子様 ・ニチハ常務執行役員 吉田 康則様 ・シェルター常務取締役 安達 広幸様 ・プラチナ構想ネットワーク顧問 鎌形 太郎
パネル ディスカッション ②	「儲かる林業」実現に向けた戦略と先行地域の取組 ・森林研究・整備機構森林総合研究所 久保山 裕史様 ・京都大学大学院教授 立花 敏様 ・サニーライフホールディングス代表取締役社長 中村 正治様 ・アルファフォーラム代表取締役 小林 靖尚様 ・アジア航測西日本国土保全コンサルタント技術部課長 小川 豪司様



ブース・セミナー開催を通じ200社・300名を超える方々との接点を獲得！

参考 ; SUNDRED INDUSTRY-UP 2025 登壇、新たな仲間づくり



未来をつくるすべての人達へ贈る

国内最大級のリビングラボと新産業共創の祭典

INDUSTRY-UP DAY

SPRING 2025

NEW INDUSTRY SESSION #3 @ Tokyo Innovation Base & 同時オンライン

3/12 (水) 17:00～17:40

産業エコシステムのリジェネラティブ・トランسفォーメーション (RX) とは

登壇者紹介（左から）

- 兼松 祐一郎 東京大学 総長室包括プロジェクト構成「プラチナ社会」総括専門講座 特任講師
- 吉井 拓史 日揮ホールディングス株式会社 サステナビリティ推進オフィシングアドバイザリーコンソーシアム ビジネスインストラクター
- 鎌形 太郎 一般社団法人プラチナ構想ネットワーク 顧問
- 辻 純一 株式会社アイジャスト CEO
- 工藤 智秀 エヌ・ティ・ティ・コミュニケーションズ株式会社 ビジネスソリューション本部ソリューションサービス部/デジタルラインベーション部門担当課長
- 吉田 直樹 SUNDRED株式会社 EVP, CSO (Chief Strategy Officer)

5. 最終目標実現に向けたシナリオとアクション – 今年度活動・成果を踏まえたアップデート版

5.1 「プラチナ社会」具現化へのシナリオー4ステップ仮説

- 今年度は第2ステップ[°]（「森林産業」フォーカス）迄を実践、次年度以降は3、4へと展開したい
– そのためにもステップ[°]1、2の加速・拡大、分散・自律的な展開への基盤づくりが重要

1

プラチナ社会実装・産業共創
プロジェクト創出加速・拡大と
スケール化

- 「プラチナ社会実装化モデル」を共通言語としたコミュニティ、アクションを、意図・意思を持って興す、誘起する
- 意思、実践知を持った層をコミュニティ化、加えて実践を踏まえた「モデル」アップデート、共有により、プラチナ社会実装・産業共創を加速、拡大、スケール化させる

2

「産業イニシアティブ」による
プラチナ新産業の共創

- プラチナ「産業イニシアティブ」活動の実践、進化を通じ、ビジョンの合理的納得、共感を起点
• 求心力として、想いを同じくする様々な活動、主体のベクトルを整え、共振・共創を興す
(次頁参照)
- 経済的に持続するエコシステムを構想・設計、産業・事業化をインキュベートする

3

「5つのプラチナ新産業」核に
「プラチナ社会」の具現化

- 「森林」に加え、「再エネ」「健康・自立－心と体、そして社会的繋がり」「人の成長・自己実現」「プラチナ観光－地域魅力・移動/関係人口増」の5産業を興す
- それを核として、「プラチナ社会」の全体像を具現化、実現する
- プラチナ社会実装・産業共創が自律進展するための基盤を構築する

4

課題解決先進国として、
「プラチナ社会」モデルの海外
展開、共創、貢献

- 「課題解決先進国」として、日本発の「プラチナ社会」モデルの海外展開、プラチナ産業共創を推進する
– 少子化先進国韓国・台湾との協働態勢は構築、そこをトリガーとした展開を構想

補足；「プラチナ社会実装・産業共創」推進の基本型

- 「ビジョン」ドリブンが原則
- 多様・多数の自律的なアプローチ、取り組みを前提としつつ、ベクトルが揃い、モメンタムが形成され、ビジョン実現に向かう
 - ・ トップダウンとボトムアップを共存・相乗させる
- PNW/イニシアティブの役割は、以下の通り
 - ・ 「ビジョン」「ロードマップ」を描き、実行を牽引するとともに、「探索・試行錯誤」の機会、プロセスを創出・誘起し、「実行・実装」の初動までに導く
 - ・ それぞれ得意とするチーム・アセットを動員し、マネージする



5.2 次年度の重点アクション（案）

■ プラチナ「森林」産業共創を一気に加速・拡大－ステップ2

- 森林フル活用事業実践加速
- 実践地域・コミュニティ拡大
- 共感起点型共創事業推進
- 啓発・普及活動実施

■ 次なるプラチナ産業の立上げ、初動づくり－ステップ3

<プラチナ再エネ産業>

- 産業ビジョン作成・公表
- 生活・生業との一体モデル構想・試行
- 普及・啓発活動実施

<プラチナ人の成長&健康産業>

- 産業の核となるトリガーPJT創出、外部共創によるイニシアティブ母/関連体づくり（「KODAMA」など）

■ 海外共創・展開への萌芽づくり－ステップ4

- 少子化先進国である日本・台湾・韓国連携での「こども未来会議」「KODAMA」事業体立上げ

■ プラチナ社会づくりの自律化基盤づくり－ステップ3

- 基盤・支援ツール普及、komiyamaファンド立上げ、モデルアップデート（モデルv3）、プラチナ社会実装・産業共創ポータル

＜狙い＞

- ビジョンの考えについて広く国民の理解を醸成
- ビジョン実現に向けて行動する賛同者を増やす

＜概要＞

①出版

- 発刊予定：2025年7月
- タイトル：「森林循環経済」
- 内容：森林産業イニシアティブのビジョンについてわかりやすく解説及び参加企業の取組の紹介

②WEBメディア（WEB版「森林循環経済」）

- 開設予定：2025年5月：その後順次充実予定
- 内容：書籍の内容の紹介、森林関係者によるコラム、関連企業の取組紹介
- 読者想定：専門家・関連企業～一般国民

参考；モデルv3バージョンアップに向けた論点例

■ 現場実践者へのさらなる広範なヒアリング

- 多様な段階のプロジェクト調査や、失敗事例（停滞・挫折したプロジェクト）の深掘り
- 仕掛け人の実際の意思決定プロセスや日々の活動を詳細に観察・記録

■ フラクタルモデルによるアクティビティ群の非線形性表現

- 入れ子構造での表現：アクティビティ群全体が各アクティビティ内で小さく繰り返される構造
- 螺旋的な進化プロセス：フランウッドの「クレーム対応を通じた品質管理の仕組み整備」のような単純な反復ではなく、学習を伴った上昇螺旋としての進行表現

■ 実践的なツールキットに落とす

- 実際に仕掛け人が使用できるワークシートやワークショップコンテンツを作成する
- ナラティブとビジュアル表現の強化

■ モデルを物語としてわかりやすく伝える手法の開発、複雑性を直感的に理解できるビジュアルデザイン

■ コミュニティ形成とノウハウ共有の場づくり

■ 仕掛け人同士の情報交換プラットフォーム

■ 実践者間での経験共有と相互学習の仕組み

補足；2030年目途に目指す姿と直近のアクションのポイント

■ 2030年目途に目指す姿

- 各拠点/産業が持続・自律的な進化を遂げ、かつ相互に協調・相乗化し、日本全体がプラチナ社会になる－より善い未来を常に探索し、変化・進化を続ける
- 21世紀、それ以降の「地球・社会・人」が目指すべき未来づくりへ、「課題解決先進国」日本が、アジアと協調、共創型リーダーシップを発揮し、その構想・具現化を牽引する
- 日本、そして世界における次世代の基幹産業を、定常・継続的に、構想・共創、実装する

■ 過年度・今年度成果、そして次年度の活動のポイント

- 2023年度；「プラチナ社会実装・産業共創」の共通言語としての「モデルv1」、東大プラチナ・SUNDREDとの協働・共創態勢構築
- 2024年度；「モデル」を活かした具体実装成果の創出、“目に見える”成果創出、共創コミュニティづくり、他産業領域頭出し
- 2025年度；プラチナ社会実装・産業共創の加速、レバレッジ/持続・自律化の仕組み構築、海外共創・展開の足掛かりづくり

※日本財団殿助成事業では、プラチナ社会実装・産業共創の「初動づくり」「共創態勢の拡充」「持続・自律化への基盤づくり」に注力させて頂きたい

Appendix

‐プラチナ社会実装化モデルのアップデート考察

考察1；主体群－「仕掛け人」の成長 / 発達プロセス

いくつかの段階、役割分けが必要となってくる、それを理解して適切な主体・チームを形成する

■ 初動期（点火役）：強い問題意識と情熱で変革を起こす

- 特徴：個人的な熱量が高く、周囲を巻き込む力がある
- 行動：率先垂範、問題提起、ビジョン提示
- 例：森林資源フル活用事業のプラチナ産業イニシアティブ分科会リーダー「熱血リーダータイプ」

■ 成長期（対話役）：関係者間の対話促進と共創を重視

- 特徴：複数の視点を統合し、合意形成を進める
- 行動：対話の場づくり、共感ベースの協力関係構築
- 例：モリジエネの対話型アプローチ

■ 成熟期（育成役）：次世代育成と権限委譲を進める

- 特徴：システム思考で全体最適を目指す
- 行動：権限移譲、メンバーの自律支援、背後からの支援
- 例：アスタネの権限委譲チェックリスト活用

*) 参照した理論的背景

適応型リーダーシップ理論：状況に応じてリーダーシップスタイルを変化させる / U理論：変革プロセスにおける深いリーダーシップの発達 / 成人発達理論：リーダーの認識枠組みの発達段階 など

考察2；アクティビティ群－トランジション・デザインの視点導入-1

「目指す未来の想像・共創」は、単一のビジョンではなく、複数時間軸で作成、階層化する

■ 短期ビジョン（1-3年）

- 具体的で測定可能な目標設定
- 現在のリソースと制約の中で達成可能な変化の明確化
- 例：森林資源フル活用事業の「部会での具体的検討項目」

■ 中期ビジョン（3-5年）

- システム変化を促す構造的転換の目標
- 新たなパートナーシップや制度の構築
- 例：フランウッドの「津山市と森林管理について長期的構想」（フランウッド）

■ 長期ビジョン（5-10年）

- 根本的な価値観・文化の変容を含む社会像
- 規範的で野心的なビジョン

考察2；アクティビティ群ートランジション・デザインの視点導入-2

「仮説構築」は、単一の仮説構築と検証のサイクルではなく、移行経路の複数パターンで設計する

■ 複数シナリオ手法の導入

- 外部環境の変化を想定した3-4種類の異なるシナリオ設計
- 各シナリオに応じた適応戦略の事前検討
- 例：森林資源フル活用事業の複数パターン化

■ 過渡期の橋渡し戦略

- 現状システムから目指すシステムへの移行期に必要な「つなぎ手」の設計
- 例：フランウッドの「施工ガイド整備」による既存建築業界との連携

■ 転換点（ティッピングポイント）の特定

- システム変化が加速する可能性がある重要転換点の特定と活用戦略
- 例：フランウッドの「他自治体や投資家の関心が高まり、事業が加速」

*) 参照した理論的背景

Irwin, T. (2015). Transition Design: A Proposal for a New Area of Design Practice, Study, and Research

Geels, F. W. (2002). Technological transitions as evolutionary reconfiguration processes

Loorbach, D. (2010). Transition Management for Sustainable Development

三つの時間軸モデル（Three Horizons Framework） - Bill Sharpe

考察3；アクティビティ群－心理的安全性構築プロセスの明示化と適用-1

モデル全体、基本思想・原則として織り込む

- リーダーの脆弱性の開示
 - 昨年度インタビューより、「失敗の責任は自分が背負う」姿勢の明示
 - リーダー自身が不確実性や学びのプロセスを共有
- 失敗を学習に変える枠組み
 - 「クレームを品質向上の機会と捉える」文化形成（フランウッド事例）
 - 「プレ・モータム(後述)」のようなリスク先読み手法の活用
- 対話の構造化
 - 「フューチャーボード」のような全員参加型の対話ツール導入（モリジエネ/横瀬）
 - 成功・失敗の振り返りの儀式化
- 行動規範の共創
 - 昨年度インタビューより、「チャレンジに寛容的な姿勢」の明文化
 - 「いいね」と伝え合える承認文化の構築

考察3；アクティビティ群－心理的安全性構築プロセスの明示化と適用-2

アクティビティ群のセグメントに応じた具体的な活動、仕組みを構想、導入する

■ 目指す未来の想像・共創

- 心理的安全性の基盤形成
- 例：初回ミーティングで「対話のグラウンドルール」の共同設定

■ 自律コアチームの組成

- 安全な失敗環境の構築
- 例：チーム内での明文化（相互支援と非難しない約束）、リーダーによる「私の失敗と学び」セッションの実施

■ 仮説の構築・検証

- 建設的フィードバックの文化構築
- 例：意図的に反対の立場からの検証

■ 実践チーム・体制の組成

- 包摂的な実践コミュニティの形成
- 例：「オープンスペースミーティング」形式の導入
(自発的な議題設定と参加)、支援と承認のメンター制度の確立

*) 参照した理論的背景

Delizonna, L. (2017). "High-Performing Teams Need Psychological Safety"

Kahn, W.A. (1990). "Psychological Conditions of Personal Engagement and Disengagement at Work"

Edmondson, A. (2019). "The Fearless Organization: Creating Psychological Safety in the Workplace"

■ プロジェクトの実装・推進

- 繙続的な心理的安全性のモニタリングと強化
- 例：定期的な「チームの健全性チェック」の実施

考察4；アクティビティ群－「センスメイキング理論」の適用

定例ミーティングのアジェンダ設計、運営に、センスメイキング/意味づけを組み込む

- ・ コアチームで大きな滞りなく推進できているプロジェクトは、定例ミーティングをうまく活用している
- ・ 定例ミーティングのアジェンダ設計、運営には、インタビューフィードバックやセンスメイキング理論（不測の事態・事象に対してそこに「意味づけ」を行いながら行動を起こし、組織に一致したベクトルを与える）を織り込む

■ メンバー間の環境の認識を揃える

環境の認識を固定するために、定例ミーティング中に先週のミーティングから行って来たことのアップデート情報を会話にて共有し、現在の認識を瞬間的にそろえることを意識的に行う

センスメイキング理論

第一段階：環境を感知する

組織は、事業環境の急速な変化に伴い、市場でのポジションと組織アイデンティティの揺らぎが起こり、イノベーションの必要性に迫られている状態である。

■ 納得できるストーリーをつくる

プロジェクトマイルストーンに対して納得をつくりやすくなり、現状認識やマイルストーンへの納得により、プロジェクトを推進させるタスクをチームメンバーが想像しやすくする

第二段階：多義性あるものの解釈を整える

ひとつの事象に対して、様々な立場の組織や人が解釈をすると、事象の認識が多様化する。メンバーの「多義性」により、組織が方向性を見失うことのないよう、リーダーは解釈の方向性を一致させるために言葉や情報を発信すべきとする。

■ みんなで次の行動について意思決定する

定例ミーティングの最後に、マイルストーンを意識して、次のミーティングまでのタスクを決定する

第三段階：イナクメント（行動・行為）を実践する

まずは行動して試行錯誤を重ね、もがいていく間に、やがて納得できるストーリーが出てくる。そのストーリーに腹落ちしながら、さらに前進する。環境に働きかけることで事象の認識をアップデートできる。